「まだ１時間もあるわね。賢くん、亜希子さん、一寸隅田川を見に行ってみない？」
３人は連れだって川の畔まで歩いた。祐子も亜希子も賢に甘えたかったが、新しく出来た姉妹を意識して我慢した。それでもふたりとも隣に新しい姉妹が歩いていることに喜びを感じていた。祐子と亜希子が並んで歩き、その後を賢が附いて行く。鹿児島から戻ってから賢には焦燥感が生まれた。自分と亜希子が体験できた消滅と帰還という現象を一刻も早く腑に落ちるものにしたかった。特に帰還する時に味わったリアルで生々しい感覚が時間経過と共に希薄になってくるような気がするのだった。それは思考では辿れない意識の感覚だった。
「消えるという現象にはいろいろな形があるよな。燃えて消えるというのはどうだ。溶けて消える、あり得るか？蒸発して消える、そういうのは物質が変化して消えることだ。自分の肉体が変化したようには見えない。そうだよな、亜希子さん。それなら、どこかに移動したのか？どこかに潜りこんでいたのか？そういうのは普通の人の脳が認識できないような状態になって、他の人の認識から消えることだ。だれも目で見ることができなくなることだ。やはり、どう考えてみても物質が変化したのではないだろう。それは復帰した時の状態でも分かることだ。失踪している間、自分の時間は経過していなかったようだし。本当にそうだとすると、時間とは一体何なのだ。それに、帰還した時は、失踪した時にいた場所は意味を失っていたようだ。ホテルの部屋に顕れたのだからな。空間とは一体何なのだ。時間も、空間も人間の脳が作り出した虚像なのではないのか？なあ、そう思わないか？祐子」
「賢くん、時間も空間も無い状態というのはどんな状態かしら」
それには応えずに賢が言った。
「俺達は空間を誤って認識しているような気がしてきた。本当は空間とは、存在を受容する容器のようなものではないような気がする。自分が認識するから、そこに空間が出来るのではないかな」
「でも、あなたもこの空間にいるし、亜希子さんもそこにいる。そして、目の前には隅田川が流れ、それが東京湾に注いでいる。空には雲が浮か

んでいる。・・・ああ、美しいわね。ねえ、亜希子さん」
「はい、お姉様。わたくしにも美しい川と海、何所までも青い空と雲。この川の畔に佇む大好きなお姉様と賢さん。これが現実でなくて何なのでしょう。わたくしがずーっと求めてきた現実ですわ」
「時間と空間は認識するものと、されるものという相反する要素が対峙するときに現れるのじゃないかな。今の人間の意識が２極化しているからこのような時空間が現れているのではないかな。本当はある特定のエネルギーの状態があって、そのエネルギーが形を取って結晶化してくると時間と空間に左右される $E=mC^2$ で表される状態になり、形を持たず空間も所有しない状態では $E=\phi e^{i\theta}$ で表されるような負のエネルギー状態なのではないか、つまり、虚空間のエネルギー状態なのではないかということなんだ。だから・・・・・」
「だめだめ、もうわたし附いて行けない」
「わたくしもです」
亜希子の携帯電話が鳴った。トラックが近くまで来ているとの連絡だった。３人は直ぐにマンションに戻った。建物の横に設けられた駐車場に中型のトラックが停まっていた。祐子と亜希子は急いで部屋に戻り扉を開放し、窓を開けたり床を簡単に掃除したりした。運転手と助手の男はベッド、ダイニングテーブル、冷蔵庫、テレビ、書棚を軽々と部屋に運んだ。賢は椅子や袋詰めの小さな荷物などの小物を運ぶだけで済んだ。運転手達は部屋とトラックの間を４往復するだけで全て運び込んでしまった。賢は用意してあった５千円札を１枚ずつ茶封筒に入れて２人の男性に渡した。運転手は「これは自分たちの仕事だから礼など・・」と言って、初め軽く辞退したが、結局強くは拒否せずに礼を言ってそれを受け取った。２人は賢の丁重な礼に恐縮していた。あまりに呆気なく終わってしまったので、３人とも拍子抜けしたような気分だった。寝室にはシングルベッドが壁に寄せて置かれ、広い居間には書棚、ダイニングテーブルと椅子、キッチンに小型の冷蔵庫、大きなものといえばその程度だった。広いマンションの部屋が益々広く感じられた。運転手が戻って行くと、ふたりの女性はダイニンテーブルの椅子に腰掛けて、繁々と

部屋の家具を見つめた。しかし、家具のことについては、一言も口にしなかった。
「この部屋は、俺には勿体無いな。もっと狭いところで十分なんだけどな」
「賢さん、広い空間の方が落ち着きますわ」
「そうよ賢くん、これからわたくしたちがお邪魔しても、十分余裕があっていいわ。でも、ソファーはいるわね」
「うん。・・・そうだ、数馬に電話しなくちゃ。祐子、一寸電話を貸してくれないか」
賢が電話すると、数馬は非常に喜んだ。「１週間後が楽しみだ」と言った。賢は「場合によっては数馬の会社が藤代肇の会社に吸収されることになるかもしれないぞ」と念を押したが、数馬は「そうなっても、止むを得ない」と前回と同じ応え方をした。
「ところで、賢、そろそろ仕事に就かないとまずいんじゃないか？」
「いや、あと３件の失踪事件を調べなくてはならない。それに、やっと、象の尻尾に触ったところだから、これから巨大な姿を見極めなくちゃあって思っているんだ」
「尻尾か。次はどこだ？」
「和歌山と大阪に行ってみようと思っている」
「中学生とサラリーマンか？」
「うん」
「いずれにしても、出掛ける前に連絡してくれよ」
「分かった」
賢が電話を切ると、亜希子が心配そうに、「すぐに出掛けるのですか？」と聞いた。
「いや、ゆきさん達をディズニーランドに連れて行ってからだよ」
「えっ、ゆきさん達って、あの遠野の姉弟のことですか？」
「そうよ。私も一緒に行くわ。弟さんが２人いるから、世話を焼くのが大変よ」
「わたくしも、連れて行ってくださいませんか？」

「うん。そのつもりだよ」
「よかった」
「ゆきさんはいついらっしゃることになったのかしら？」
「明後日、金曜日の夜だよ。やはり、前の晩に来ないと、ディズニーランドは無理そうだからな。そうだ。２泊することになるから、この部屋に泊めてやろうか。フローリングだけど、マットレスを敷けば、あとは布団さえあれば何とかなるな」
「でも、ゆきさんがいるわよ」
「大丈夫、俺は数馬の所に泊まるから」
「わたくしたちも、お食事のお手伝いをしますわ。ねえ、お姉様」
「そうね。金曜の夜、土曜の朝、それと日曜の朝というところかしら、ねえ、賢くん」
「うん、金曜日は夜食程度でいいと思う。土曜日と日曜日の朝は君たちに来てもらうんじゃ時間的に遅くなるから、前の日の夜に材料だけ用意しておいて、朝は自分たちで食事をしてもらおうかと思っているんだが、どうかな」
「いいわ、私がここに一緒に泊まるわ。姉弟３人じゃ心細いでしょう。それに、誰かいないといざという時に困るし」
「そうか、それじゃ祐子に頼むか」
「わたくしも、一緒に泊まります」
「それじゃ、４人分の布団を用意しなくちゃな」
「わたくしが用意致しますわ」
ゆき達が新幹線で東京駅に着いたのは午後７時１０分を回った頃だった。東京駅では３人がＪＲ乗り継ぎ口で出迎えた。太郎と信次は目敏く賢を見付けると、遠くから手を振った。
「小父さーん」
ふたりは駆け出して来て改札口のゲートの手前で止まり、ゆきが来るのを遅いと言わんばかりに手招きしている。ゆきは賢を認めると、一瞬止まって頭を下げ、それから重そうな旅行用バッグを肩に下げながらゲートまで来ると、バッグを手前に押し出しながら改札口を出た。花柄のブ

ラウスにピンク色のジャケット、オレンジのスカートを身に着けて、黒い靴を履いていた。唇にやや濃い目の赤い口紅を付けているのが、ゆきが精一杯化粧したことを物語っている。太郎と信次はゆきの真似をして、切符を自動改札機に入れ、ゲートが開くのを待ってから駆け抜けた。ふたりとも長袖のシャツを着て、スニーカーを履いている。
「ゆきさん、太郎くん、信次くんいらっしゃい。疲れたろう」
「いいえ、大丈夫です。内観さん、ありがとうございます」
「一寸紹介するね。これがゆきさん、そして太郎君、信次君、こちらが祐子お姉さんと、亜希子お姉さん。小父さんの友達だよ」
「ゆきさんと太郎君と信次君ね。祐子です。よろしくね」
「亜希子です。ゆきさん、よろしくね。あちらはもう大分寒くなって来たのかしら」
賢がゆきの荷物を持ち、6人は連れ立って日本橋側の出口に向かって歩き出した。
「早かったね。遠野を何時に出たの？」
「今日は午後お休みをもらったんです。２時に遠野を出ました」
長い通路を歩きながら、賢は「ゆき達はかなり疲れているだろう」と思った。亜希子がゆきの方を振り向いて言った。
「お腹が空いたでしょ。食事はしたのかしら」
「はい、出て来る時にコンビニでパンとお茶を買って新幹線の中で食べました」
「でも、パンだけじゃ物足りないんじゃないの？」
祐子が言うと、太郎と信次は「うん」と素直に応えた。
「八重洲地下街で食事をしよう。俺たちもまだ食事してなかったよな」
賢は踵を返すと、全員を導いて八重洲への改札口を出た。ゆきもやはり空腹のようであった。夕食を摂るという話になって、パッと顔色が明るくなった。「やはりお腹が空いていたんだ」と賢は思った。ゆきにとって東京は小学校の修学旅行と高校の時に１回訪れただけだった。その時は八重洲地下街という商店街があるなどと謂うことすら知らなかった。綺麗な店々が明るく、賑やかで、きらきら輝いて見える。

「何が好き？」
祐子が太郎に言った。
「僕、ピザが好き」
「ぼくはカツ丼が好き」
信次も負けずに言った。
「ゆきさんは？どうかしら」
「わたし、何でも好きです。でも、一番好きなのはステーキかな」
「よし、全員の希望が叶うレストランに入ろう」
６人はニュー八重洲というレストランに入った。ゆきの好きなステーキは無かった。その代わり、ハンバーグを注文した。賢達はここに来る前に軽く食事をしていたが、３人ともスパゲティを注文した。揃って食事を済ますと、賢は八重洲から続く地下通路を３人を連れて東西線の大手町駅に向かった。ゆき達には東西線の地下ホームがかなり遠くに感じられた。歩き続けてやっと辿り着いた地下鉄大手町のホームは、ゆきに「異質な世界に来てしまった」といった、少し不安な気持ちを起こさせたが、信頼できる賢と共にいると思うと、途端にその不安も消え去った。門前仲町に着いたのは８時半を回った頃だった。駅からマンションまではそんなに遠くに感じなかった。外は夜の帷に包まれていて、八重洲のような光の洪水は無く、急に寂しさが襲ってきた。マンションに入ると、部屋の奥に４人分の布団が二山に分けて積み重ねられていた。昨日購入したばかりの３人掛けと１人用のソファー、それにセンターテーブルの応接セットが置かれている。やっと部屋らしくなってきたと賢は思った。
「さあ、中に入って」
賢の案内で、ゆきが「失礼します」と言いながら太郎と信次を導いて部屋に入った。賢は３人をソファーに座らせた。祐子と亜希子はダイニングテーブルの椅子を持って来て座り、賢が一人掛けのソファーに座った。
「お疲れ様。今日はゆっくり休んで疲れを取るといいよ。とは言っても、明日は早めに起きるんだぞ。ディズニーランドだからね。今日は祐子さんと、亜希子さんが一緒にここに泊まるからね。僕は明日、7時にここに来るから、それから少しして出掛けよう」

太郎と信次が「やった」と口々に言って喜んだ。ゆきはトラベルバッグのチャックを開け、中から包みを３つ取り出した。
「これは、遠野のお饅頭です。皆さんで召し上がってください」
３人が礼を言ってそれぞれ受け取った。５人は入浴を済ますと、亜希子がベッドに寝、ほかの４人はマットレスと布団を広間の床に敷いて寝た。布団に入ってからも、太郎と信次は興奮してはしゃいでいたが、ゆきに叱られて静かになり直ぐに眠りに落ちた。亜希子はふたりが寝付くとベッドルームに入って行った。ゆきは弟達が寝付いた後も、目が冴えて眠れなかった。祐子がそれを覚って話し掛けた。
「ゆきさん、お母さん代わり大変ね」
「はい。でも、弟がよく言うことを聞くので何とかなってます。今日のように弟を連れて遠くまで遊びに出掛けることはほとんどできませんが、弟たちも不平なんか言いませんし。この前、内観さんがお見えになった頃が一番きついときだったんです。少し仕事に慣れてきて時間的な余裕が出来、将来のことを考えることができるようになって、今後の生活に凄く不安を感じてきたんです。でも、内観さんが保険会社と交渉してくれたおかげで保険金が下り、やっと息を吐くことができました。内観さんには本当に感謝しています。あの人は、わたしにも弟達にもとっても優しくて、わたし、苦しい時はいつも内観さんのことを思い出して、頑張ることにしているんです」
「そう、彼はそう言う人よ」
祐子はまた一人、競争相手が出来たのかと思った。翌朝、ゆきは５時２０分に目が覚めた。いつも起きている時間だ。台所のスモールライトが点いていて、祐子が食事の支度をしていた。夜着は布団の上に畳んであって、既に服を着替えている。ふと気付くと、亜希子は洗面所で顔を拭いていた。既に身繕いを整えている。ふたりの子供はまだ寝ていた。ゆきが祐子の近くに行って「おはようございます」と言った。
「おはよう。よく眠れた？」
「はい、とってもよく眠れました」
亜希子が台所にやって来た。

「おはようございます」
ゆきも祐子も亜希子の方を振り向いて
「おはようございます」
と言った。
「お姉様、今日は済みません。明日はわたくしが準備致します」
祐子は会釈をした。
「わたしにも何かお手伝いをさせてください」
「いいのよ。あなたたちはお客さんなんだから」
「ありがとうございます」
ゆきはクローゼットに行き、昨日バッグから出して衣紋掛けに下げておいた薄紫地に黄色の模様の入ったワンピースに着替えた。着替え終えて洗面所で顔を洗ってから、二人の弟を起こした。
「太郎、信次、起きなさい」
ふたりがパッと飛び起きて布団の上に座った、その敏捷さに、祐子と亜希子は思わず顔を見合わせてしまった。
「あら、ディズニーランドが効いたのかしら？」
祐子が言った。
「いつも寝起きはいい方なんですよ。大体わたくしの一声で起きます。でも、今日はいつもよりもっと速かったわ」
太郎と信次は欠伸をしながら
「おっは」
と言った。みな口々に
「おはよう」
と応えた。その時ドアが空いて賢が入って来た。
「おはよう！みんなよく眠れたか？」
「うん」
太郎と信次が応えた。女性達は賢を振り向いて微笑んだ。賢は畳んである布団を壁際に積み上げてから、ソファーに腰を下ろした。食事は２カ所に分かれて摂った。食卓にはゆきと顔を洗ったばかりの太郎、信次が着いた。賢、祐子、亜希子はソファーのテーブルで食べた。祐子の用意

した食事は、目玉焼きとハム、サラダ、トースト、牛乳、ヨーグルトだった。そして、デザートにメロンを添えてあった。
「わあ、メロンだ、メロンだ」
太郎と信次が喜んだ。食事を済ませてマンションを出たのは７時１５分過ぎだった。
「いくらなんでも早過ぎないかしら」
祐子が言った。
「いや、今日は一番で入るくらいの気持ちで行こう。できるだけ多くのアトラクションを見たいじゃないか」
祐子はディズニーランドのゲートに着いた時、賢の計画が正しかったことをに知った。既に長い列が出来ていた。時間は８時２０分だった。賢が代表して６人分のパスポートというどんなアトラクションも観ることのできるチケットを購入した。ゆきは自分達の分は払うと言ったが、賢の「東京にいる間は僕に任せろ」という言葉に嬉しそうに頷いた。賢は会場案内のパンフレットとチケットを３通ずつゆきに渡した。ゆきは済まなそうに礼を言って賢からチケットを受け取ると、列に戻って来て太郎と信次にパンフレットを渡し、チケットを見せた。ふたりはチケットも欲しがったが、ゆきが預かっておくと言って、それをハンドバッグに入れた。暫く列に並んでいたが、太郎と信次はそわそわして落ち着かない。パンフレットを開いて、どこから見るか、どれが一番面白いかなどと、わいわい騒ぎ立てている。ゆきも浮き浮きしているようだった。
祐子が
「ここはとっても広いから、迷子にならないようにしようね。もし迷子になったら、あの尖った建物の出口付近に来ることにしようね。あれなら遠くからも見えるし、人に聞いても分かるからね」
太郎が「マジックキングダムのことでしょ」と言った。
「そうよ、よく知っているわね」
「おれ、テレビで見たことある」
「おれもある」
ゆきは笑った。

「でも、皆一緒に行動した方がいいと思いますわ」
と亜希子が言った。
「そうだな。原則、皆一緒に行動しよう。それでいいね」
全員同意した。長い間待ってゲートを入ると既に多くの入場者が一斉に思い思いの方向に駆け出している。太郎と信次の希望でカリブの海賊館から見ることにした。既に長い列が出来ていたが、入り口に近かった為、１０分も待たずに入場できた。ボートの先頭にゆき、太郎、信次、次の列に賢を挟んで祐子と亜希子が乗った。ボートが動き出して暗闇になると、信次がゆきに齧り付いている。賢は可笑しかった。人形達の動く姿がゆき達にはかなりリアルに見えるようだった。太郎も手摺にしっかりとしがみ付いて、真剣になってアトラクションに見入っていた。「カリブの海賊」を出ると、太郎が言った。
「ああ凄かった。おれ、こんなの初めて見た。小父さん、あれってみんな人形なんでしょ」
「さあ、どうかな、本物もあるかも知れないぞー」
「おれ、こえー、おれ、子どものがいい」
「おめえ、目瞑ってて何も見てなかったでねーか」
「おれ、見てたもん。こえー悪者が睨んでた。おれ、おしっこ」
太郎と信次の会話が楽しさを増す。信次をトイレに連れて行き、太郎にも用足しさせてから、イッツ・ア・スモールワールド館に入った。カリブの海賊館からはかなり移動しなければならなかった。やはり長い列が出来ていて２０分も待つことになった。待ち行列は空いた空間を無くすようにうまく誘導されている。ゆきにとっては、列に並んでいるいろいろな人たちの服装やアクセサリーを、間近で眺められるのも楽しかった。太郎と信次は嬉しくて仕方ないといった風で、列を出て表通りに出てみては直ぐに戻って来たり、あちこち飛び廻っている。ゆきに諭されて太郎と信次が列から離れなくなって間もなく館の中に入り、それから少し列が続いて、漸くボートに乗る順番が来た。今度は先頭に太郎、信次、祐子と乗り、次の列にゆき、賢、亜希子が乗った。子ども達はやはり暗い雰囲気に緊張感を高めているようだった。祐子がふたりに

「今度は、怖くないわよ。大丈夫」
と言ってふたりの緊張を和らげようとしている。ゆきが亜希子に言った。
「ここは、夢の世界のようだって聞きました」
「そうよ。とっても楽しいわ。世界中の子供たちが出てくるわよ」
それを聞いて信次が
「おれ、早く見てー」
と身体全体で後ろを振り向こうとしたが、祐子に制されて元に戻った。ボートが進むといきなり、音楽と共に明るい空間が開けた。周りに可愛い人形が歌を唱い、踊りを踊っている。二人の子どもが歌に合わせて身体を小さく揺すっている。ゆきも嬉しそうな顔をして、賢の方を見た。
「わー、かわいい」
賢は微笑みを返した。亜希子が賢の右手を握った。亜希子も楽しんでいるようだった。船が進んで行くと、ゆきは亜希子が賢の手を握っているのを見て自分もさりげなく賢の手に触れた。賢がその手を軽く握った。ゆきは自分から男性の手に触れるのは初めてのことで、その手を握り返えされて心臓の鼓動が激しくなった。母親が失踪して以来忘れていた緊張感だった。父親に手を握られたことがあるかどうかさえも確かでなかった。賢はふたりの女性のするに任せて軽く受け止めた。賢にはゆきと亜希子の喜びが伝わってくるようだった。祐子はふたりの子どもに注意を払いながらも、自分も楽しんでいた。祐子にとってディズニーランドは３度目の入園だが、以前とはまた違った感覚を覚えた。それは多分、子ども達を意識しながら、アトラクションを見るという少し大人になった自信の様な感じを含んでいた。ボートが降り口に向かい始めたとき、ふたりの女性は、そっと賢の手を離した。賢はゆきの握っていた方の掌に、ゆきの汗の名残りを感じた。イッツ・ア・スモールワールドを出ると、外は日差しが強くなってきていた。亜希子が
「少し待っていてね」
と言って、アイスクリームショップに駆けて行った。祐子も後を追った。ふたりがソフトクリームを３つずつ手にして戻って来た。
「ありがとう、亜希子おねえさん。祐子おねえさん」

「ありがとう」
太郎と信次はソフトクリームを受け取ると、早速舐め始めた。賢が信次の肩を軽く押して、通りの端に置いてあるベンチに腰掛けさせた。まだ、ベンチにはそれほど人が座っていなかったので、全員場所を確保できた。少し休んでから、次のアトラクションに向かった。賢は次に蒸気船マークトウェイン号の乗り場に連れて行った。
「ここはミシシッピー川だよ。僕は本物のミシシッピー川で船に乗ったことがあるけど、今でもこんな形の船が行き交っているんだ。夕日を受けたミシシッピー川の中をゆっくり進む船はなかなか素晴らしいよ。この船は西部開拓の頃の探索船を模倣しているんだな。君たち、トムソーヤの冒険を読んだことあるか？」
「ない」
「ないよ」
「わたしはあります」
最後にゆきが眼を輝かせて応えた。強い日差しの中を行く船は、子ども達には現実に近いイメージを与えているようだった。しかし、冒険の世界に入って行くことは許されていない。あくまで傍観者なのだ。鎖に繋がれた犬のように、子ども達はじっとして突然水面に出現する模型に目を奪われている。ゆきは時々空を見上げて深呼吸していた。それから魅惑のチキルーム館、白雪姫と７人のこびと館と比較的待ち時間の少なくて済むアトラクションを廻ってから昼食にした。レストランはとても混雑していたが、「どうせ待つのなら」ということでカリブの海賊館に併設されているレストランに入ることにした。レストランもアトラクションと同様の長蛇の列が出来ていた。アトラクションの川縁側に何とか席を確保できた。ボートが不安そうな子どもや嬉々とした大人達を乗せて通り過ぎて行く。信次が思い出したようにゆきに席を寄せた。
「信次、こわいんだろう」
「こわくなんかないや。おれ、あんなわるものやっつけてやる。えい」
信次はウルトラマンの構えをした。祐子と亜希子は声を上げて笑った。
「午後は、スプラッシュ·マウンテンに乗ろう。太郎君、信次君、大丈

夫かな？ジェットコースターみたいなものだよ。一寸待つけどね。それからビッグサンダー･マウンテン。あとはあまり混まない所を見て、パレードを待とう。夜は花火が上がるぞ」
賢がそう言うと、太郎と信次は目を輝かせた。ゆきも浮き浮きしている様子が分かる。
「わたし、パレード見るのとっても楽しみにしていたんです」
「実はわたしもパレード大好きなのよ」
と祐子がゆきの近くに顔を寄せて言った。食事は長い時間待った割にはあっけなく済んでしまった。ゆきや弟たちは食事より午後のアトラクションに心が捕らわれていて気もそぞろだった。子ども達はどのアトラクションにも目を見張り興奮した。スプラッシュ・マウンテンは太郎のお気に入りのようだった。冒険好きの子どもを賢は逞しく感じた。ミッキーマウス･レビュー館でステージを見つめていた信次が、太郎の耳元で、
「あれ、母ちゃんみたいだ」
と言った。
「どれ、・・・ほんとだ」
一人で一番手前の手摺に寄り掛かっている女性の後ろ姿だ。ゆきもその声でその女性を見つめた。
「ほんと、似ているわ。でもきっと別の人よ」
その時、声が聞こえたかのようにその女性が振り向いた。
「ちがう」
太郎が小声で言った。アトラクションを見つめていたゆきの目に涙が光った。こんな所に野岸孝子が居るはずはなかった。賢が隣からゆきに声を掛けた。
「必ず戻るよ。そう信じて」
小さいが力強い声だった。ゆきは右手で涙を拭って頷いた。夕方まで廻れる限りいろいろなアトラクションを廻るつもりだったが、結局ビッグサンダーマウンテン、スプラッシュ･マウンテンとミッキーマウス･レビュー館の３カ所を廻ったところで、エレクトリックパレードの席取りをしようということになり、パレードの通る通路の広めの路肩に席を陣取

った。まだ陽は残っていて、パレードが始まるまでには３０分以上もあったが、早くも路肩は人で埋め尽くされていた。大人達があちこち探し廻って漸くまとまった６人分の場所を確保できた。祐子が持参したビニールシートを広げた。ゆきと弟たちはそのシートに嬉しそうに座った。祐子と亜希子が売店で、コーラとポテトチップス、ポップコーンを買って来た。周りが人で埋め尽くされた頃、陽が傾き初め辺りを夕暮れの帷が包んできた。間もなくエレクトリックパレードが始まる。パレードは３人にとって、すさまじい光の嵐だった。ゆきは美しく着飾った女性の踊る姿を夢心地で眺めていた。時々現れる黒い服を着た悪魔の出現は、太郎と信次を萎縮させた。その悪魔を追い払う騎士の演技があると、3人は拍手をして喜んだ。これでもかというほど繰り返される光のページェントに半分酔ったような心地で３人は見入っていた。パレードが終わると賢が
「さあ、おみやげを買って帰ろう」
と言った。ゲートの近くにあるワールド･バザーという土産物店も人の海だった。ゆきはふたりの弟を見失わないように細心の注意を払っているようだった。その３人を亜希子と祐子が見守り、５人を賢が見守っていた。祐子や亜希子がみやげを買ってあげると言ったが、ゆきはみやげは自分で買いたいと言って聞かなかった。スーパーの仲間に、高校の時の友達に、親戚の叔父さん･叔母さんにと、きょろきょろしながら、人混みを掻き分けながらみやげ物を探し廻っているゆきの姿に賢はあどけなさを見ていた。賢はミッキーとドナルドがそれぞれ飛行機に乗っている小さな置物を買った。
「これは、記念だよ」
賢はそう言って子ども達にひとつずつ渡した。
「小父さん、ありがとう」
ふたりはその置物の入った袋を大切そうに抱えた。ゆきが戻って来ると、ふたりは早速、賢からみやげを貰ったことをゆきに報告した。ゆきは賢に丁寧に頭を下げた。
「これはわたくしたちからのプレゼントよ」

亜希子と祐子がミッキーのぬいぐるみをゆきに渡した。飾っておくこともできるような、綺麗な作りのものだ。大きな包みのミッキーをゆきは「ありがとうございます」と言って受け取った。一寸恥ずかしそうだった。ゆきの両手はハンドバッグと、みやげ物の入った袋と、ミッキーの袋で塞がった。ゆきの荷物を亜希子や祐子が担い、もう一度シンデレラ城の前のオムニバスの広場に出ると丁度空高く花火が上がった。6人は暫く佇んで花火を見ていたが、賢が太郎達を促して、縁石に腰掛けさせた。花火が終わってゲートを出たのは9時を回った頃だった。太郎も信次も空を明るく染めるワールドバザーの照明に後ろ髪を引かれるように振り返りながらバス停に向かって歩いた。バスに乗るのに1時間待った。バスも超満員で体を動かすこともできない。浦安駅もごった返していて、人を押し分けてやっと動けるほどだった。賢は子ども達の手をしっかり握って人混みの中を進んだ。駅のホームも人で一杯、電車も満員だった。ほとんどの人が混雑の中で手にした大きな荷物の占める隙間を求めて苦心している。中には風船を引っ張っている子供もいる。子供の手を離れて空高く飛んでゆくプラスティックス製の風船が時々、太郎や信次の意識を捕らえているようだった。浦安から門前仲町までの間はそれほど長く感じなかった。まだ、ディズニーランドの衝撃的な色と光のページェントが脳裏から離れない内に門前仲町に着いた。駅を出ると全員、がやがや喋りながら賢の後に附いて歩いた。5分ほど歩いていつものファミリーレストランに入った。ウエイトレスが2テーブルを合わせて席を作ってくれた。ゆき達は疲れ切った様子で、どっかと席に着くと荷物を大切そうに床に置いて大きな伸びをした。

「疲れただろう。さあ、夕食にしよう」

ゆきと子供達はハンバーグ定食、亜希子と祐子はサンドイッチ、賢はマルゲリータピザを頼んだ。食事を始めると3人は直ぐに元気を取り戻した。祐子と亜希子も一息付けたと感じていた。賢は3人を気遣って、どこか怪我をしなかったか聞いた。3人とも無事だった。食事を済ますと、一行は先ほど通って来た道を少し戻ってマンションに帰った。レストランを出てからマンションに着くまで太郎と信次がゆきに向かって、面白

かったアトラクションのことを話している。ゆきも一々頷いて応えていた。部屋に入ると賢は３人に翌日の予定を話した。ゆきとふたりの弟はソファーにきちんと腰掛けて賢の話を聞いた。朝８時に出発ということになった。賢は、明日はスローペースで過ごさせようと考えていた。先ず、荷物を全部持って東京駅に行き、コインロッカーに荷物を詰めてから地下鉄を使って都内の代表的な所を見物する。そして、夕方新幹線で帰宅するという計画を話した。初め真剣に聞いていた子供達もついこっくりとやってしまっている。賢は話を簡単に切り上げて言った。
「さあ、風呂に入って、ぐっすり眠ってね。じゃ、又明日の朝来るからね。それまでに荷物をまとめておくんだよ。祐子、亜希子さん、あとは頼んだよ」
祐子と亜希子、それにゆきまでが賢がドアの外に出るまで見送ってくれた。賢は階下に降りるとどっと疲れが襲ってきた。
翌朝、賢がマンションに着いたときには、既に出発の準備ができていて、皆ソファーや椅子に腰掛けて待っていた。一旦東京駅のコインロッカーに荷物を預けると、地下鉄丸ノ内線に乗り銀座で下りた。満員で鮨詰め状態の電車に３人ともビックリしている。今日は銀座、浅草、東京スカイツリー、新宿の順に見物する予定だ。ゆきは小学６年の修学旅行の時と、高校１年の時に来たことがあると言っていたが、もう忘れ掛けているようだった。東京の街にはゆきを惹き付けるものはあまりないようだった。只、人の多さが遠野の朝の駅とあまりに懸け離れていた。太郎と信次にとっては初めての東京だった。人混みの中を、賢や祐子に手を引かれて歩いていると、信次が時々苦しそうにした。賢達は子供達の為に極力空間を確保するように努めた。銀座は若者で溢れていた。ブランドショップの並ぶ通りに入り、２、３の有名ブランドの店を覗いた。ゆきは入るのがあまり気乗りしないようだったが、亜希子が
「経験、経験」
と言いながらゆきの腕を引いて中に入って行った。ゆきの日常とは乖離した異常な価格を示す値札の付いたバッグや腕時計などが並んでいた。ゆきは居心地の悪さを感じて直ぐに外に出た。百貨店に対してもゆきは

同じような反応を示した。太郎と信次は車道の真ん中を陣取って演奏をしているバンドに興味深そうに見入っている。祐子と賢が必ずふたりの手を引いて歩いた。賢は常に祐子と亜希子を意識していて、どちらかの行方を確認できなくなると、もう片方に動かないように言い、その間に分からなくなった方の居場所を確認した。
「銀座って、若者が多いのね。もっと年配の人たちの街かと思ったわ」
ゆきが誰に言うでもなく呟いた。
「夜は年配の人たちの街に変わるわ」
祐子も独り言のように応えた。銀座を一周して駅に戻ると、銀座線に乗って浅草に向かった。浅草は直ぐに３人のお気に入りになった。地下鉄の駅を出て少し歩くと左手に雷門がある。ここは浅草寺の正面入口で、右に「風神」左に「雷神」を配置してある。賢が
「ここは正式には「風雷神門」というんだけど、略して「雷門」って言われるようになったんだ。雷門、聞いたことあるか？太郎君」
「おれしらねえ」
「おれもしらねえ」
風神、雷神の前を通り抜けるとき、信次がゆきの手に縋り握り締めた。
「ばか、これは木で出来ているんだ。それにちゃんと網が張ってある。信次はこわがりだな」
「だいいち、こいつ、おこっておれのことにらんでいやがる」
祐子と亜希子の笑い声を背に受けながら賢は仲見世通りに入って行った。石畳の道の両側に珍しいものを売っている土産物店が並んでいる。雷門から宝蔵門までは、観光客の最も楽しめる場所だ。「一昔前の江戸の雰囲気はこんな感じだったのかしら」とゆきは思った。賢が途中でゆきに藍染めの布地の財布を買って渡した。ゆきの顔がポット赤くなった。太郎と信次には小銭用のビニール製の財布をそれぞれ買って渡した。
「小父さん、ありがとう」
「小父さん、ありがとう」
信次はいつも太郎の言葉を繰り返す。ここは只、ぶらりと歩いていると時間が経過していないような感覚を味わえる場所だ。浅草寺と浅草神社

が共存している。日本人には神も仏も同じ存在に映るようだと祐子は思った。賢にそんなことを言ったら、きっと笑われる。この日はエスコート役に徹して、大人でいようと思った。宝蔵門を潜ると、門の裏側に大きな草鞋が釣り下げてある。太郎が
「おい、信次、これ見てみろ、でっけえ草鞋だ」
「鬼がはくのか？こんなでっけえ鬼はこええな」
「仁王様の草鞋よ。みんなをお守りしてくれる神様よ」
亜希子の説明で信次の眉間から皺が消えた。浅草寺の宝物殿、五重の棟を見物してから昼食を摂ることにした。
「ここは落語や漫才とか、歌舞伎なんかも見られるんだ。東京人にとっては、寛ぎの場所だな」
賢がゆきに向かって話し掛けた。
「東京にはいろいろな楽しい場所があるのですね。本物を見ると凄いでしょうね」
ゆきは先程賢からもらった財布の入った紙袋を大切そうに左手に持ち替えて見つめながら言った。
「お昼は、わたくしたちがステーキをごちそうするわ」
そう祐子が言うと、亜希子も微笑みながら２度小さく頷いた。ゆきの口元がほころんだ。
「わたし、大好物です。こんなにしていただいて、どうしたらいいか分かりません？」
太郎と信次が
「やったあ」
と言って飛び跳ねた。食事はとても賑やかだった。ゆきは久し振りに口にするステーキにウキウキしていた。その微笑みが、ステーキの味を引き立てていた。食事をしながら、信次はパンダを見たいと言い、太郎は東京スカイツリーに登りたいと言い、２人で言い争っている。賢が両方とも見ようと言った。食事を済ますと、６人は先ず上野に行った。入り口を入って直ぐの所にパンダ館があった。パンダは横になって眠っている。信次が

「おい、パンダ、起きろ、おれっち遠くからやってきたんだぞ」
と言って怒鳴っている。ガラス越しのパンダはそんなことは構わずに昼寝を貪っている。人の流れもあって、あまり立ち止まってゆっくり観ることができなかったが、それでも信次は満足したようだった。動物園の中は広く、心ゆくまで見物させてやりたかったが、帰りの時間がある。太郎や信次の好きな大型の動物を見物すると、子ども達の飛び跳ねる行動に任せて、およそ２時間園内を駈け巡ってから上野を後にした。そこから、直ぐに東京スカイツリーに向かった。ここは太郎が大喜びだった。第一展望台でガラス張りの床を覗いて叫んだ。
「すげー、おれ、怖くてここに乗れないな」
太郎はガラスの上に片足をそっと出して載せてみては離し、暫くそんなことをしていたが５分もするとおそるおそる乗ることができるようになった。一旦ガラス板に乗れるようになると、今度は自慢げにその上で飛び跳ねて見せたりした。信次は太郎のやっていることを横目で見ていたが、結局ガラス板の上には乗らず仕舞いだった。東京スカイツリーからは都内が一望の下に見える。ゆきが
「全部見渡せるのですね。でも、富士山は見えないのかしら。遠くの景色は霞んでいるみたい」
と言った。
「東京には皇居と公園以外に、自然の空間がほとんど無いのよ。あなた達の住んでいる遠野の様な澄んだ空気は、ここには無いわ」
祐子が言った。賢がアイスクリームを３つ買って来て、ゆきと太郎、信次に渡した。ゆきはまた恥ずかしそうに、しかし微笑みながら言った。
「ありがとうございます」
「小父さん、ありがとう」
「小父さん、ありがとう」
いつもの２つの礼がゆきの礼の言葉に続いた。東京スカイツリーを出た後で、土産物店の間を通り抜けた。ツリーのオープン当初ほど繁盛しているようには見えない。賢は太郎と信次にスカイツリーのプラモデルを買って与えた。ふたりの意識は直ぐにそのプラモデルに引き付けられた

が、それを浅草で賢からもらった財布の入っているビニール袋に入れるように、ゆきに促されて大人しくその中に仕舞い込んだ。
「さあ、今回の東京見物はここまでだよ。これから東京駅に戻ろう。今、４時半だから５時ちょっと過ぎの新幹線に乗ることにしよう」
６人が東京駅に着くと、賢がみどりの窓口に行き、遠野までのチケットを購入した。ゆきがその後に附いて行き、ハンドバッグから財布を出して料金を支払おうとしたが、賢がそれを制して、ここは自分に任せるようにと言った。
「僕たちの所まで来るのはゆきさん達の力。ここから戻るときは僕達が送り出すんだよ。そうしないと、僕も気が済まないよ」
ゆきは何度も礼を言ってからチケットを受け取った。新幹線の出発までには３０分ほどの時間があった。６人は地下にあるコインロッカーから荷物を取り出すと、賢がゆきのトラベルバッグを持ち、祐子と亜希子がゆきのみやげ袋を２つずつ下げ、ゆきはハンドバッグを肩に掛け、太郎と信次はみやげの小袋を持って、新幹線の改札口まで来た。祐子と亜希子が５人に少し待つように言って駅弁店に行き、幕の内弁当とお茶を３つずつ買って持って来た。その間に賢は３人分の入場券を購入した。改札を入ると、まだ１０分ほどの時間があったが、列車はもうホームに入っていて、既に乗車している客もあった。ゆき、太郎、信次を促して列車に乗せてから３人も荷物を持って後を追った。沢山の荷物を棚に上げると、太郎が窓側、次に信次、通路側にゆきが座った。
「荷物、全部持てるかな？」
賢が心配そうに聞いた。
「はい大丈夫だと思います。太郎と信次にも少し持たせますから」
「俺たちが附いてるから大丈夫だよ」
太郎が言った。
「太郎君、信次君よろしく頼んだよ。じゃ、気を付けてな」
「気を付けてね」
「君たち、ゆきお姉さんの言うことを聞くのよ」
「はーい」

「はーい」
「いろいろお世話になりました。このご恩は一生忘れません」
「そんな別れの言葉を使うなよ。また直ぐに会うことになるから。身体を大切にしてな」
３人は電車を降りて、ホームから列車のガラス越しに手を振った。太郎と信次も手を振った。
「ありがとう」
唇の動きが言葉となって３人の心に響いた。やがてアナウンスがあり、賢達は白線の内側に移動した。ドアが閉まり列車が動き始めても太郎と信次は手を振っている。ゆきが頭を下げた。ゆきの目に涙が光った。賢達は次の車両が通り過ぎるまで手を振っていた。３人は東京駅で別れた。祐子も亜希子も賢のマンションに同行したかったが、亜希子は祐子を祐子は亜希子を意識して、そのまま青山の家に帰ることとした。翌日の１０時に寝具を取りに行くと亜希子が言った。賢は駅のコンビニでパンと牛乳を買ってマンションに戻った。部屋はきちんと片付いていて、綺麗に清掃されていた。ソファーと壁の間に布団が積み重ねてあり、その上に枕が並べてある。布団の横に亜希子と祐子のパジャマなどの入った小バッグが置かれている。寝室のベッドは亜希子が使ったはずだった。綺麗にベッドメイキングされていた。居間のカーテンの下に薄いピンク色のハンカチが落ちていた。賢は「何故こんな所にハンカチが落ちているのだろう」と思った。まだ使ったことのないような、きちんと４つ折りに畳まれたハンカチだった。白い刺繍糸で Yuki と縫い込みがあった。
「ゆきのハンカチだ。電話がきたら伝えよう。しかし、祐子と亜希子がどうして気付かなかったのだろう」とふと思った。ゆきは楽しんだろうか。太郎や信次は５時間近くの帰途の旅に耐えられるのだろうか。列車が出て行く時に見せたゆきの涙に、妹に対するような愛おしさを覚えた。ゆき達は東京にいる間、野岸孝子の失踪については一度も口にしなかった。しかし、あのミッキーマウス・レビュー館で一人の女性を野岸孝子と勘違いした。いつも、母親を求めていたのが分かる。だから自分も、祐子も亜希子もそのことには触れずにいた。

「必ず野岸孝子を帰還させてみせる」
賢は心に誓った。「失踪事件調査ノート」を出すと、野岸孝子のページを開き、省察の欄に、今回のゆき達の旅行と、ミッキーマウス・レビュー館で、ゆき達が母親のイメージを追い求めていた様子を記載した。シャワーを浴びてまだ新しいソファーに凭れていると電話が鳴った。祐子からだった。ふたりは家に着いたようだ。賢は祐子に二日間の礼を言った。そして、亜希子に替わるように言い、亜希子にも同じように礼を言った。再び祐子が電話口に出た。
「ゆきさんから「着いた」って電話があったら連絡してね」
電話を切ると、賢はセンターテーブルに「失踪事件調査ノート」と「原智明語録」を開き、並べて置いた。失踪事件調査ノートは野岸孝子のページを、原智明語録は全項目一覧のページを開いた。そのページの２０番目から２３番目の項目を意識した。
Ｎｏ．２０「確実な認識ができると、存在が確定する。エーテルに意志と感覚的認識が融合して働けば形態が現れる。思考はその調整役を果たす」
Ｎｏ．２１「この世界は複素空間でできている。実は虚の像、虚は実の像だ」
Ｎｏ．２２「物質と空間との間に境目は無い。振動が異なるだけだ」
Ｎｏ．２３「光は実空間の経路と、虚空間の経路の両方の経路を通る。虚空間を通った光は干渉なんかのエネルギー変化の時に実空間に現れる」
ここの部分に野岸孝子を引き戻す鍵が潜んでいるように思えた。そして、鹿児島の研究会の事務所で見た３１番目の項目も気になった。できるだけ記憶を辿って、その内容を思い起こそうとした。「想念の具現」というタイトルははっきりと覚えている。確か賢がいつも考えている「想念を具現する為の条件」について書かれていたと思った。それにしても、Ｎｏ．２０はポイントを得ている。その具体的な方法が３１番目の項目に記載されているのだと思った。自分と亜希子は異なった存在だ。そのふたりが同時に失踪し、そして同時に帰還したのは、今考えても奇跡以

外の何ものでもない。どうしてふたり同時に帰還できたのだろう。それはあのレストランで賢と亜希子が同時に消えた時とは異なる。鹿児島ではふたりは行動を共にしていて、考えている対象も内容もそれほど違いは無かった。しかし、意識の底で何を求めていたかということになると話は別だ。自分の思考の方向は海の老人に向いていたが、意識の底には祐子がいた。亜希子の思考の方向はやはり海の老人のはずだったが、意識の底の状態は分からない。もし、意識の対象が藤代登紀子に向いていなかったら亜希子は帰還できただろうか。それほど難しいことを祐子がやってのけたのだ。祐子は確か、自分が意識と思考を賢に向けて集中した時、賢は一度帰還し掛かったが直ぐに消えてしまったと言っていた。祐子に呼ばれた時の記憶は自分にはない。自分がどういう状態でいたのかも分からない。祐子が登紀子を呼んで、自分が賢に向けて意識と思考を集中する間、登紀子に亜希子に向けて意識と思考を集中させたことが鍵であったことにほぼ間違いなさそうだ。その時の登紀子の意識はどのような状態だったのか、それを知りたいと思った。様々な可能性について思考を巡らしている時、電話が鳴った。祐子からだった。
「あなた、私、今自分の部屋なの。やっとふたりきりでお話しできるわね。あなたの部屋に旅行バッグがあるでしょ。そのバッグの一番上に入れてあるのがわたしのパジャマよ。その間にデジカメを挟んであるの。研究会での極秘情報が写真に撮ってあるわ。勿論盗み撮りじゃないのよ。でも公認されているわけでもないの。わたしが写真を撮るのを所長が黙認してくれたのよ。所長自身が各ページを捲ってくれたの。デジカメは１０００万画素あるから、多分全部読めると思うわ」
「本当か。それは凄い。兎に角、先ずノートに写し撮るよ」
「でも、これは内緒だから、全部写し終わったらカメラにある語録の画像は消しておいてね」
「うん、分かった」
「あなたがいないと、寂しいわ」
「さっきまで会っていたじゃないか」
「あなたの意識はゆきさん達に向いていたでしょ。だから、この二日間

はあなたと私の間の距離は、かなり離れていたのよ。今、こうして電話で話していたら、やっといつもの距離に戻ってきたわ」
「そうだな」
「じゃ、お休みなさい。あ・な・た・大好き」
祐子は大好きと言う部分を、ほとんど聞き取れないような小さな声で言って、賢が電話を切るのを待った。賢は、祐子が切らないと見て、受話器を置いた。それから賢は布団の脇に置いてある旅行バッグのチャックを開けた。薄水色に花柄のパジャマを手で押さえてみた。直ぐに堅い物に触れて祐子のパジャマの間からそれを取り出した。祐子の言っていたデジカメだ。賢は順次画像を開いていった。祐子はいろいろな写真を撮っていた。その中に賢が初めて見るものもあった。桜島を背景に小さなボートが映っている写真があった。それが海の老人の乗ったボートであることに直ぐに気が付いた。その写真を見ていて妙なことに気付いた。前後の景色の焦点はあっているのに、ボートの部分だけ焦点ぼけしているのだ。賢はその写真を記憶に留めた。そのほか、知らない人たちの写真が何枚かあって、研究会の馬場所長と橘が並んで写っている写真が現れた。ふたりとも唇に意味ありげな薄笑いを浮かべているようだ。この写真に、祐子が語録の写真を撮るのを許す気持ちが表れていると賢は感じた。その後の１２枚のノートの写真が語録の写真だった。賢はその画像を拡大したり縮小したりしながら、そこに書かれている文章を全てノートに書き写していった。読みにくいページもあり、２時間１５分掛けてやっと全てのデータを書き写してしまうと、賢は１２枚の画像データを全て消去した。目が疲れていた。賢は空腹感を覚え、さきほどコンビニで買ったパンと牛乳を取り出して貪るように食べた。ソファーから見える窓の外はすっかり闇の中に沈んでいて、遠くに遊園地のイルミネーションが輝いている。カーテンを閉めてソファーに戻ると、いつしか眠りに落ちていった。賢は以前の祐子のアパートのソファーで祐子を抱きしめていたが、突然電話が鳴った。電話に出るのは煩わしかった。しっかりと齧り付いている祐子の腕をやっと解き解し、電話に出ようと身体の向きを変えた時、はっと目が覚めた。電話が鳴っている。慌てて、受

話器を取ると、ゆきからだった。
「ゆきです。いま家に着きました。何から何までありがとうございました」
「よかった、無事着いたんだな。太郎君や信次君はしっかり起きていたかな？」
「信次が新幹線の中で眠ってしまいました。太郎は、眠そうでしたが、最後まで頑張ってくれました。遠野の駅でタクシーに乗れましたから、何とか家まで辿り着くことができました。もう、ふたりとも布団の中で寝入っています」
「ゆきさん。大変だったね。頑張れよ。僕も一生懸命お母さんが戻れる方法を探すから」
「内観さん、ありがとうございます」
ゆきが涙ぐんだのを賢は感じた。
「明日も早いんだろう。直ぐに休むといいよ」
「はい。祐子さんや亜希子さんに、ありがとうございましたってお伝えください」
「ああ、そうだ。ゆきさん、ハンカチ忘れていったよ」
「あの、・・・内観さん、わたしのことを忘れないように持っていてくださいませんか？」
「わかった。でも、またすぐに会えるよ。身体を大切にしろよ。それじゃ、おやすみ」
「おやすみなさい」
時計を見ると１１時を回っていた。きっと乗り継ぎに時間が掛かったのだろう。明朝、ゆきが元気に起きることができるか心配だった。電話機の留守録のランプが点滅していた。再生すると、亜希子からだった。電話をくださいというメッセージが録音されていた。賢は１１時過ぎだが、亜希子の携帯に電話を掛けた。亜希子は待っていたように直ぐに電話に出た。
「賢さんですか？」
「うん」

「ゆきさんから電話がありましたか？」
「今、あったよ。無事着いたって。心配だったのかい？」
「ええ。・・・それと、お休みなさいと言いたかったの」
「亜希子さん、いろいろありがとう。３人ともとても喜んでいたよ」
「わたくしはまだまだです。とても賢さんのように優しくなれません」
「優しくなろうなんて考えないほうがいいよ。僕は君たちと一緒に過ごせて、それだけで最高だったよ」
「そちらに行きたいわ」
「そんな意識を持っては駄目だよ。またテレポテーションしてしまうからな。明日会おう。おやすみ」
「・・・おやすみなさい」
賢は直ぐに祐子に電話を掛けて、ゆき達が無事着いたことを知らせた。同じ家に住む二人の女性に別々に電話を掛けるのを不自然に思ったが、暫くは止むを得ないと考えた。賢は疲れていた。
翌朝は９時過ぎまでベッドの中に居た。やっと起き出してシャワーを浴び、身繕いを整えると、意識を開放して窓の外を見た。東京にも大洋に繋がる自然との接点があることをふと思った。隅田川の河口付近は工場や倉庫などで埋め尽くされていて、その端にある公園は、都会という工場の中で身体を休める、休憩所のような働きをしているのかも知れない。マンションの下方に目を移すと、亜希子の家から来たと思われる軽トラックが駐車場の入り口付近に停まっている。賢の指定駐車場所には藤代肇の専用車が入っている。インターホンが鳴った。亜希子の声だった。セキュリティロックを外すと、暫くして亜希子と祐子、それにトラックの運転手がやって来た。祐子も亜希子もすっきりした顔をしていた。トラックの運転手は大きな布袋を持参して来ていた。手際よく布団を布袋の中に詰め込むと、それを束ね、枕を布袋に押し込んで大きな２つの包みに纏めた。運転手と賢が一つずつ包みを抱えてトラックまで運んだ。運転手はそのままクリーニング店に布団を運ぶと言った。賢が指定駐車場所に停まっている乗用車の運転手に挨拶をしてから部屋に戻ると、祐子と亜希子が朝食の準備をしていた。

「賢さん、朝食まだでしょ」
祐子がトーストとチーズ、ヨーグルトを食卓の上に用意した。亜希子は３人分のインスタントコーヒーを入れて食卓に並べた。
「ありがとう。ゆきさん達、とても喜んでいたよ。帰りはやはり信次君が寝てしまって大変だったようだ。家に着いたのは１１時過ぎだった」
「それは大変でしたね。今日はゆきさんお勤めなのでしょう」
亜希子も気にしていた。
「うん、そう言っていたな」
「賢さん、父が「数馬さんと話してみたい」と言っていましたわ」
食事を終えると賢は早速数馬に電話を掛けた。数馬は直ぐに伺いたいと言ったが、月曜日でもあり、藤代肇は会社に出ているので、会社にコンタクトを取るようにと伝えた。数馬は直ぐに面接を申し入れると応えた。賢は何とか話がうまくゆくようにと励ました。祐子が他人行儀に
「賢さん、今度は和歌山の事件を調査するのですか？」
と聞いた。
「うん、中川愛子さんのケースを調べてみたいんだ。このケースは難しそうだ。母親が躁鬱状態になっていて、精神状態が安定していないようなんだ。父親は現在はタイル張りの請負業をやっていて、変な宗教団体に入っているんだが、気性が荒いから調査がスムーズにできるかどうかも分からない。共働きで夫婦仲はあまり良くないらしい。もっともこれは週刊誌に書いてあった記事の内容だから、行ってみなくちゃ分からないけどな」
「家族で食事をしている最中に失踪したんでしょう？」
祐子が聞いた。
「うん。だけど、消えるところを見ていた訳ではないようだ。ふたりともその時の状況を上手く説明できないらしい」
「調査はどの位の期間になるの？」
「１週間が限度だろうな」
「わたし手伝えるかしら？」
祐子が聞くと、

「わたしもお手伝いさせていただきたいわ」
と亜希子が言った。賢は
「今回は一人で行くよ。ふたりともご両親にこれ以上、ご心配をお掛けしては済まないよ」
「分かったわ。それじゃ、わたくしたちに手伝えることができたら連絡してね」
祐子が賢を会話から解放した。
「賢さん、わたくしたちは早瀬由美さんについて、少し調べてみたいと思います。ねえ、亜希子さん」
「はい、お姉様」
賢は少々不安になったが、祐子の失踪への認識レベルが浄蓮の滝に行った頃よりずっと高まっていることを思い、迷妄の闇に陥る危険性は無いだろうと判断した。
「少し、気を付けて調べた方がいいぞ。不可解なことが多いからな」
「分かったわ。困ったことがあったら連絡するわ。そう、賢さん、携帯電話を持って欲しいわ」
「そうだな。こういう調査を行うんじゃ、携帯は必需品だな。今日、これから契約して来るよ」
「賢さん、失踪事件調査ノートの早瀬由美さんのページをコピーさせて頂きたいわ。コンビニまで私たちと一緒に行っていただけないかしら」
祐子はもう一冊のノートの内容も知りたかったが、賢が何も言わないので、聞くことができずにいた。賢は原智明語録と失踪事件調査ノートの２冊だけを持った。祐子は二人分のパジャマや着替えなどの入ったトラベルバッグを手に下げ、亜希子はゆきから貰ったみやげの入った袋を下げてマンションを出た、祐子と亜希子は運転手に待たせたことを詫びた。運転手は待つことに慣れているようで、読んでいたと思われる新聞紙を４つ折りにしてダッシュボードに入れて、車を出すと亜希子の頼んだ通りコンビニエンスストアで一旦停車した。賢はふたりを待たせて、店に入り語録の１から３０項目の一覧と調査ノートの早瀬由美のページをコピーした。車に戻ると賢は祐子に２枚のコピーを渡して、

「それじゃ明日の朝発つから、暫しの別れだな。元気でな」
と言った。ふたりは微笑んで手を振った。乗用車がコンビニから離れて行くのを見送って、賢は近くの携帯電話ショップに向かった。カメラ付の機種で一番費用の掛らないオプションを選んだ。そこからいつものファミレスまでは１ブロックだった。賢はマルゲリータピザを注文した。食事が来るまでの間、取扱説明書を読んだ。自分でも感心するほどスムーズに仕様が頭に入った。食事を終えると携帯電話が開通していた。ファミレスを出ると、賢は初めに祐子に電話し続いて亜希子に電話した。ふたりとも、賢が携帯を持ったことを喜んだ。賢はふたりの電話番号を電話帳に記録し、続いて、数馬、亮子、ゆき、藤代肇宅の電話番号を登録した。賢は一度掛けた電話の番号は少なくとも１ヶ月ほどは記憶していられるほどの記憶力を持っている。自分でも記憶力には自信があった。ふと思い付いて、鹿児島の原智明研究会の電話番号も追加登録した。

和歌山

賢は８時３分発の新幹線のぞみ号で京都まで行き、そこからスーパーくろしお号に乗換え、午後１２時０１分に和歌山駅に着いた。ここの失踪については何の手掛りも無く、どのようにアプローチしたらよいか、電車の中で考え続けてきた。「先ず愛子の家に行って、全体像を掴もう。それから、愛子の通っていた中学校を調べて、愛子のクラスメートと話してみよう。更には愛子の生活を覗き見てみよう」と思った。そう考えて、賢は祐子を連れて来ればよかったと思った。祐子は人との繋がりを直ぐに作り上げる能力を持っている。祐子に接した人たちは直ぐに祐子を親しい仲間として扱うようになる。こういう時は祐子の力が欲しいと思った。しかし、初めは自分だけで取り組んでみようと考えた。和歌山駅の北側には紀ノ川が流れている。和歌山にはＪＲの和歌山駅と南海鉄道の和歌山市駅の２駅があり、電車が鉄橋を通り過ぎると和歌山市内に入ったという感じがしてきた。市街地に入って初めの駅は紀伊中ノ島駅で、次の駅が和歌山駅だった。東京の駅での乗降を常としている賢には

少し寂れた感じがした。南海鉄道の和歌山市駅までは少し離れていて、電車を乗り換えて行くか、一旦駅を出てバスで行くしかない。どうして駅を分けたのだろうかと思った。既に和歌山市駅の近くにあるワカヤマ富士山ホテルを予約してある。午後は先ず中川愛子の家を訪れてみようと思っていたので、小バッグを取り出してから、取り敢えずトラベルバッグをコインロッカーに入れた。そこから南海鉄道に乗り、紀ノ川駅で降りた。愛子の家は川沿いにあるとのことだった。週刊誌の情報から寺の近くにあることは分かっていたが、それ以上の情報は持っていない。駅から出ると先ず交番を探した。いくら探しても交番は見当たらなかった。しかし、通り沿いにある果物屋で聞くと、中川愛子の家は直ぐに分かった。店の主人から訪問する理由を執拗に聞かれた。愛子の家は木造一戸建ての古い家だった。玄関には呼び鈴が付いていない。引き戸の間に向けて「ごめんください」と声を掛けたが、何の応答もなかった。時間を置いて３度声を掛けた後、少し引き戸を引いてみた。鍵は掛かっていなかった。玄関から入る光は土埃の付いた曇りガラスで薄暗く散乱し、暗いジトジトした空間を浮かび上がらせた。天井には蜘蛛の巣が張っていて、誰も住んでいないのではないかと思われるような感じがする。
「ごめんください」
賢が再び呼び掛けると、正面の襖が開いて中からオレンジ色のシャツに紺の袖無しのチョッキを着た痩せた５０前後と見える女性が、半開きにした襖の間からそろりと半身を覗かせた。女性は敷居に右手を着いたままである。髪の手入れもしておらず、化粧も施していない。その動きは非常にゆっくりしていて、青白い顔はまるで病人がやっとの事で身体を動かしているかのようである。
「どなた」
「ごめんください」
そう言いながら玄関の引き戸を半開きまで開け、賢は言った。
「東京から来た内観と申します」
「なにか？」
「はい、こちらが愛子さんのお宅と伺って参りました」

「はあ？あの子ならいませんよ」
「お母様でいらっしゃいますか？　実は愛子さんの失踪の件で是非お伺いしたいことがありまして」
「警察の方？」
「いいえ、わたしは一連の失踪事件を調査している者です。何とか失踪された方々を救い出したいと思いまして」
「そんなこと無理よ。警察があんだけ調べたのに何にも分からなかったんだから」
中川麻子は半身を出したまま、姿勢を糺す様子もない。
「実は、わたし自身も一度失踪したことがあるんです。しかし、こうして戻って来ることができました。だから、愛子さんもきっと戻って来られると思います」
賢のこの一言を聞いて麻子の虚ろな眼差しが、少し引き締まったかに見えた。
「えっ、あなたも消えてしまったことがあるの？」
「はい、一月ほど消えていました。そして、ある人がわたしを引き戻してくれたのです」
「えっ？誰だって？」
「わたしの友人が呼び戻してくれたのです」
「えっ、その人、娘のことも呼び戻してくれるかしら」
「そんなに簡単じゃないようなのです。愛子さんのことを、詳しく教えていただけませんか？」
「一寸待っててね」
麻子はそう言うと開き掛けた襖をそのままにして奥に入って行った。半開きの襖を通して部屋の中が伺える。部屋の中央に座卓があり、その上に新聞や広告ちらし、菓子の袋などが乱雑に散らかっている。その先には奥にもう一つ部屋が続いているようで、奥の部屋へはも別の襖を隔てて繋がっている。麻子はその襖も開け広げて中に入って行った。奥の部屋には布団が敷いてあるのが見えた。麻子は１冊のアルバムを手にして戻って来た。戻って来る時に新聞紙や広告ちらしを抱えて奥の部屋に投

げ込んでいるのが分かった。
「玄関じゃ何ですから、どうぞ上がってください」
と麻子は言った。
「いいえ、こちらで構いません。少しお話を伺わせていただければ･･･」
「そうですか」
そう言うと麻子は手にしているアルバムを２畳ほどの玄関の板の間の中央に置いて、自分も流し足で座った。賢も上がり框に腰掛けて、女性の方に半身になった。
「あの子の写真ですよ。あの子は可愛い子でした」
そう言いながら女性はアルバムを広げた。女性のシャツは上から２つボタンが掛けて無く、チョッキのボタンは全く締めてなかった。アルバムを開こうとしたとき、胸がはだけて乳房が見えた。ブラジャーも付けていない。それに気付く様子もなく、アルバムのページを捲っている。麻子の目が潤んできた。
「あの子がいなくなって、わたしはもう生きてなんていたくないわ」
涙がぽたりとスカートの上に落ちた。それを拭うでもなく、麻子はページを捲ってゆく。賢はポケットからハンカチを取り出して渡した。麻子はそれを無造作に受け取ると、両目を拭って、それをまた無造作に床の上に置いた。愛子は普段眼鏡を掛けていたようだった。写真の半数は眼鏡を掛けた顔で写っていて、半数は眼鏡を外している。幼児の頃は目が悪くはなかったようである。肌は浅黒いが、目が大きく丸顔の可愛い娘だった。
「愛子さんは一人っ子ですか？」
「・・・・・それがいなくなっちゃって・・・」
麻子は言葉に詰まって、また両目から涙が流れ落ちた。涙を拭おうともしない。写真の中には父親の写真は無かった。母親の写真は所々に現れた。写真に写っている愛子の母親はここにいる麻子とは別人ではないかと思われるほどだった。顔の色艶も良く、若々しく美しかった。ここにいる麻子は明らかに憔悴し切っていて、賢がさっき感じた第１印象より多分ずっと若いのだろうと思った。

「ご主人の写真は無いのですね」
「あんなひと、知るもんですか」
賢は中川恭一について、それ以上聞かなかった。
「愛子さんはどんな娘さんですか、お聞きしてもよろしいですか？」
「あの子はとっても優しい子だわ。わたしも、家の亭主も馬鹿なのに、あの子は頭が良かったのよ。学校じゃクラスで１番だったの。学年でも１番じゃないかって担任の先生が言ってたわ。学校の本やノートよりほかのものは何にも欲しがらなかった。だけど優しいのよ。わたしが風邪を引いたりすると、学校を休んで看病してくれるの。わたしが仕事から帰って来て疲れたって言ってしゃがみ込むと、料理から片付けまでみんなやってくれるのよ。あの、馬鹿亭主にだって優しいのよ。あの馬鹿が法華経がどうの、地獄がどうのとくだくだしゃべっている時だって、うんうんと言って聞いているんだ。後で、「お父さんの言う通りなんか」と聞くと、「少しおかしいと思うけど、お父さんがそう信じているから、聞いているの」って、殊勝ったらありゃしない。あの馬鹿亭主が変な宗教に嵌っちゃって、仏壇も、神棚も焼いちゃったのよ。わたしゃ怒り狂ったわよ。だけどあの子は「お父さんを許してやって」って言うんだよ。ああ、愛子が戻って来なきゃ、わたくしは死ぬしかないのよ」
麻子は憤りと悲しみに震える声で、啜り上げながら話した。賢は床の上のハンカチを手にして、それを麻子に渡した。麻子は
「ありがとう」
と言いながら涙と鼻水を拭った。
「あなたも優しいのね」
そう言いながら、自分の胸元がだらしなく開いているのに気付いて、身体を捻って賢に背を向けると、シャツのボタンを２つ締め、チョッキの一番上のボタンを締めて髪の毛を手で掻き上げた。自分の姿に気付いたようだった。
「ごめんなさい。少し待ってください」
そう言うと、麻子は部屋に入り奥の部屋に行った。そして１、２分してから湯飲みに茶を入れて戻って来た。

「こんなところで、ごめんなさい」
麻子はうす赤の口紅を付け、身だしなみを整えて戻って来たのだ。賢は驚いた。５０歳過ぎと思っていた麻子はまだ４０歳にもなっていない若い姿に変わっていた。
「粗茶ですけど、どうぞ」
「ありがとうございます」
「ごめんなさい。わたし、だらしなくなってしまって。恥ずかしい」
「いいえ、こんな悲しい思いをされているんですから当然です。わたしが全力で、何とか愛子さんを探し出します。是非協力してください」
「嬉しい！あなたが初めてです。愛子が居なくなって初めの内、わいわい集まって来ていた人も、誰一人「あの子を探し出して見せる」なんて言ってくれなかった。すぐに誰も寄り付かなくなっちゃって。あなただけです」
「それは仕方ないことだと思います。皆どうしていいか分からないのですから。だから・・・」
「でも、あなたは、探し出すと言ってくださったわ。嘘でもいいんです。わたしはその言葉だけで生きていけるのよ」
麻子の目に再び涙が浮かんだ。しかし、その涙には輝きが戻っているように賢には思われた。
「どこか具合が悪いのですか？床に着いていらしたようですが」
「娘がいなくなってから、身体が動かなくなっちゃったんです。お医者さんは鬱病だって言って薬をくれたんですが、駄目なんです。今はいいんですが、時々体が動かなくなっちゃうんです。うちの馬鹿亭主は「気の所為だ、やる気を出せ」って言うんです。食事の支度をしないと怒って座卓を引っ繰り返すんです。今悔やんでも仕方がないですが、何であんな男と一緒になったんかと思うと、悔しくて悔しくて・・・」
「娘さんを失った悲しみと絶望感が、あなたの動きを止めるように作用しているんですよ。あなたの思っている方向に身体も動こうとします。もう、絶望感を抱かないでください。そして、娘さんが戻って来ると信じて、戻って来てからどんな楽しいことがあるかを思っていてください。

身体は治ります。気分も晴れて来ますよ。勿論、お医者さんの処方してくださった薬は続けながらね」
「何だか、励ましてもらって、気分が晴れてきたような気がします」
「一つ大切なことを教えてください。愛子さんがいつも心に抱いていたり、大切に思っていたことですが、心当たりがありますか？」
麻子は暫く考え込んでいたが、はっと顔を上げると
「あの子、国際的バレリーナの森川洋子さんに憧れていたんです。テレビに森川さんが出ると感動して涙を浮かべていました。・・・あとはあの子にとっては、馬鹿なわたしと亭主のことをとても大切に思っていてくれたくらいですかね。わたくしたちが喧嘩をしている時は、とても悲しそうで。その姿を見ると、わたしはあの馬鹿亭主の御託に返答返しするのを止（や）めざるを得なくて」
「今のお話、とても参考になりました。それで、愛子さんが大切にしていたものは何かありますか？」
「あの子は特に大切に持っている品物は無かったように思います。まあ、強いて言えば日記帳くらいのものかしらね」
「日記を付けていたのですか？」
「日記と言っても、詩集みたいなものなんですけどね。夢のような話が書いてあるんですよ。警察の方に見せたのですけど、あまり参考にならないからと言って直ぐに返してくれました」
「わたしにその詩集を見せて頂けませんか？」
「それは構いませんよ。一寸待ってください」
麻子はまた奥の部屋に入って行くと、そこから階段を昇って行くような音がした。暫くすると、今度は階段を駆け降りて来る音がし、Ａ５サイズほどの和紙の表紙のノートを持って来た。麻子は意識してか、賢の身体に触れるほど近くに座り、賢の前に広げて、自分もそれを覗き込むような姿勢を取った。賢は麻子が少し香水を付けてきたのが分かった。ノートの初めのページには次のように書いてあった。
<わたしのたいせつなもの>
わたしは小さなからすの子

おとうさまがやってきて
わたしを守ってくださるの
お母様がやってきて、
おいしい、お食事くださるの
わたしの羽は、まだすこし
いつもこの巣で待ってるの
きょうも夕日が沈むころ
おとうさまとおかあさま
そろって戻ってきなさるわ
わたしのはねははえたかな
わたしのおなかはいっぱいか
いつもわたしにささやくの
夕日が落ちて暗い闇
おとうさまとおかあさま
そっとわたしによりそうの
わたしの色は真っ黒で
夜の闇では見えないの
それでもわたしは安心で
しずかに朝まで眠れるの
わたしは小さなカラスの子
お母様が産んだのよ
お父様が育てたの
わたしは大きくなったとき
おかあさまになりたいの

「可笑しいでしょ。小さい頃に書いた詩なのよ。まるで童謡みたい」
「でも、純粋で美しい詩ですね。この詩集、貸していただけないでしょうか？」
「まだ、こちらにいらっしゃるの？」
「はい。明日お返しに伺います」

「それじゃ、どうぞ持って行ってください。それに、明日はこちらではなくて、夕方４時頃に、和歌山市駅のすぐ前の喫茶店、あすかみちに来てください。わたしも一寸所用があってその近くに行きますので」
「でも、お体は大丈夫ですか？もし具合が勝れないようでしたらこちらにお電話ください」
賢は早速買ったばかりの携帯の番号を知らせた。賢は礼を言って愛子の家を出た。麻子が玄関から外まで出て見送ってくれた。賢は麻子がよほど勇気付けられたのだろうと思った。
ホテルの前の大通りを越え路地に入ると直ぐ、あすかみちという看板が見えた。賢は午前中警察署に行き、愛子の失踪事件について聞いて来た。警察もほかの失踪事件との関係もあり、はっきりした説明はしなかった。もう、調査を継続しているようには見えなかったが、この事件はまだ調査中とのことだった。警察が調べた限りでは、愛子が同級生からいじめを受けていた形跡はなく、犯罪に絡むような物的証拠も見い出せなかったとのことだった。警察を出て、昼近くに愛子の通っていた紀ノ川第２中学校に行った。昼休み中だったので、校長、教頭、担任から愛子の話を聞くことができた。愛子は極めて品行方正、成績優秀な少女だった。表面上は地味で目立たない女生徒だったが、同級生の信望も厚かった。過去に一度、勉強ばかりして生意気だということで番長の女生徒と数人の不良女生徒に呼び出されて暴行を受けそうになったが、その時の愛子の態度が凛としていて、初め愛子の襟を掴んだ番長も気力負けしてしまい引き下がった。それからは不良生徒達も愛子に一目置くようになったと担任は言っていた。
店の中に入ると、やや暗い照明がされていて落ち着いた感じがした。店には２組のカップルが離れたテーブルに座って親しげに話をしている。麻子はまだ来ていなかった。賢は入り口に近いテーブルに座った。ウエイトレスが注文を聞きに来た。賢がコーヒーを注文すると、少しして緑色の地に赤色の花模様の入ったブラウスとベージュのスカートを履きサングラスを掛けた３０歳前後と思われる女性が入って来て、賢の席の前まで来ると、

「こんにちは」
と言った。麻子だった。賢は昨日の印象とあまりにかけ離れているので唖然とした。
「お待たせしたかしら？」
「いいえ、今来たばかりです。身体は大丈夫ですか？」
「ええ、。この通り。今日は朝から、元気よ」
麻子はウエイトレスを呼んでオレンジジュースを注文してから、賢の方に向き直りサングラスを外した。
「内観さん、きのうはどうもありがとうございました」
左目の廻りに大きな黒ずみができている。分からないように化粧で誤魔化し、サングラスで隠していたのだ。
「どうしたんですか？その黒ずみ」
ウエイトレスがオレンジジュースを持って来て、ちらりと麻子の方を見た。彼女が立ち去ってから、一寸小声で麻子は言った。
「あの、馬鹿亭主がぶったのよ。いつも気に入らない時はぶつの」
少し伏し目がちにした麻子の目に涙が浮かんでいる。
「どうして女性に手を上げるのだろう。ひどい。・・・殴られたところは大丈夫ですか？」
「昨日はとても重苦しかったわ。でも今は押さえると少し痛いけど大丈夫」
「少し見せてください。すこし、顔を出してみて」
賢は可哀想でじっとしていられなかった。麻子は一瞬躊躇したが、直ぐに前傾姿勢になってテーブルの上に顔を突き出した。賢は右手の人差し指で麻子の目の廻りの黒ずみにそっと触れて、黒ずみをなぞりながら
「痛くないですか」
と言った。鼻骨の部分に触れたとき麻子はピクリとした。
「痛みますか？」
「ええ、そこ、凄く痛いわ」
賢は鼻の反対側に触れてみた。麻子は「そこも痛い」と言った。
「随分強く殴られたんですね。一寸、病院に行った方がいいかもしれな

い。もし鼻の骨に罅（ひび）が入っていたら大変だ」
「そんなのいやよ。恥ずかしくて病院になんて行けないわ。大丈夫よ。いつものことだもの」
愛子を失って悲嘆の底にあるとき、更に亭主からの暴行を受けている麻子が哀れで、賢は麻子の瞳を見ていると涙が浮かんでくるのを覚えた。
「わたしのこと、そんなに心配してくださって・・・・ありがとう。うれしい！　でも、大丈夫だから」
麻子の頬を涙が伝わって落ちた。麻子はハンドバッグからガーゼのハンカチを取り出して拭った。
「一度ご主人に会ってみます。どうしてこんな酷いことをするのか、きっと心の中に何か抱えているんじゃないかと思います」
「あなたがお話しくださっても、多分だめだと思うわ。昨日の夕方あいつ、「飯はまだか、早く支度しろ」っていつものように凄い剣幕だったの。わたし、昨日はあなたにお会いして、少し希望が持てて、とても嬉しかったのよ。あの馬鹿も、少しは喜ぶと思ったわ。そしたら、「香水なんか付けて、色気付きやがって」って言ってぶたれたの。挙げ句の果てにお膳までひっくり返して、わたし、お腹を蹴られたの。本当に悲しかった。「俺が、法華経を受持しているのが分からないのか？馬鹿が、仏の慈悲を何だと思っている。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と訳の分からないことを言って猛り狂ったのよ。わたし、今度ばかりはもう我慢出来なくなっちゃって、昨日の晩に着るものを鞄に詰めて家を出て、駅前のビジネスホテルに泊まっているんです」
「えっ、そこのホテルですか？」
「ええ、取り敢えず、そこに・・・・他に行く宛ても無いし・・・」
「僕も、そこに泊まっているんですよ」
「あら、それは偶然ね。・・・・内観さん、・・・・今日はわたしに付き合ってくださらない。愛子のことを一杯話したいの」
麻子はやや遠慮がちに言った。
「僕は一向に構いませんが、あなたの身体が心配で・・・・」
「大丈夫よ。あいつに殴られるのは慣れているもの。体が悪かったら、

もうとっくにおかしくなっているわよ」
「でも、時々身体が動かなくなるって仰っていたでしょう。本当に大丈夫かな」
「今日は愛子のことを聴いて欲しいわ。あの子のこと、何とか救い出してやりたいの。わたしのことは何とでもなるわ。だけど、何故あんなに優しい愛子が・・・」
麻子の声が詰まった。また、一筋の涙が流れ落ちた。
「今日は、一緒に食事をしましょう。僕がご馳走します。ご主人のことは、今日は放って置きましょう。少し自省した方がいいかも知れませんし」
「あいつは反省なんてできませんよ。自分の言っていることが絶対で、法華経以外に信じられるものは無いと思っていますから」
ふたりはあすかみちを出て暫く歩いた。歩きながら賢が言った。
「そうだ、肝心の日記帳をお返ししなくては」
「内観さん、あなたが持っていてください。きっと愛子を探すときの役に立つような気がしますから」
麻子が賢を誘導するように、駅と逆の方に向かって歩いた。暫く行くと麻子は立ち止まった。
「ここ、食事もできるし、少しお酒も飲めるわ」
居酒屋風の小料理屋だった。引き戸を開けて中に入ると、右側がカウンター席になっていて左側に座敷席が設けられていた。座敷席には４つの座卓が置かれていて４，５人ずつ座れるようになっている。４つの座卓の間には竹屏風が置かれている。一番端の席は中壁で仕切られていてカウンター側からは直接見えない作りになっている。全体的にこじんまりとした作りだ。ふたりが今夕初めての客の様だった。白い割烹着を着た５０格好の板前風のマスターが威勢良く声を掛けた。
「いらっしゃい。おふたりさんで？座敷の方へどうぞ」
「はい、食事はできますか？」
賢が聞くと、マスターはにっこり笑って応えた。
「勿論です。今日は飛び切りのマグロが入ってますよ。あとは烏賊、生

エビなんかもお勧めです。メニューにもいろいろありますから、ゆっくり選んでください」
「摂り合えず、ビールを頂けますか？」
賢は麻子の顔が他の人から見えないように配慮し、麻子を促して座敷の一番角のテーブルに壁に向かって座らせた。それから、賢は座卓の反対側に廻り麻子と向かい合わせに壁を背にして座った。
「はい、お待ちどう。こちらがお通し、ウニの塩辛」
麻子は直ぐにビールを手にすると、やや流し目で
「内観さん、どうぞ」
と言って賢の差し出したグラスになみなみと注いだ。賢はビンを受け取ると麻子が遠慮勝ちに差し出すグラスに注いでから
「愛子さんの帰還に感謝して、乾杯！」
と言った。麻子は、「ふふっ」と笑って
「乾杯！」
と同調した。賢が冗談を言って自分を元気付けてくれるんだと思った。
「もう、愛子が戻って来たみたいね」
「戻って来るって確信しなくてはね。それが大切なんだぞ。必ず戻って来るから」
麻子は２度頷いた。
「でも、お酒を飲んでも大丈夫ですか？」
「大丈夫よ。本当は亭主に内緒で時々飲んでいるのよ。だって、辛くて眠れないんだもの。今日はわたし、幸せよ」
「マスターがお勧めの、マグロを食べてみようか？」
「ええ、わたし、お刺身が大好きなの。暫く食べてないわ。亭主が生ものを用意すると怒るから」
「マスター、マグロ頼みます。それと、生エビ、たこ、なんかの刺身も」
賢が声を掛けた。刺身は直ぐに運ばれて来た。マグロは中トロだった。麻子は嬉しそうに微笑みながらマグロの刺身を箸でつまむと、山葵を載せ、醤油にたっぷり浸けてそれを賢の方に差し出した。
「内観さんどうぞ、初めにいただいて」

賢は少し躊躇したが、顔を前に出して口を開けた。麻子がマグロをそっと賢の口の中に入れた。山葵の辛さが鼻から目に抜けて、涙が浮かんできた。賢は麻子の元気な笑顔が嬉しかった。
「あら、ごめんなさい、サビが効き過ぎたかしら」
麻子はとても陽気になっている。自分もマグロを口にして嬉しそうに食べた。
「温かいご飯があるといいわね」
「うん・・・マスター、ご飯とみそ汁を頼みます。それに、何か煮物があれば」
「あいよ」
マスターがご飯と、みそ汁、肉じゃがを持って来た。
麻子はおいしそうにご飯を食べ、みそ汁を啜った。
「とっても美味しいわ」
まるで、これまでこんなご馳走を食べたことがないとでも言わんばかりだった。食事を済ますとふたりは店を出た。麻子が愛子の話をしたいと言い、暫く歩いてから１軒のパブに入った。パブには中央に楕円形のカウンターがあり、周囲にテーブル席があった。カウンターには３組のカップルの客がカクテルを飲んでいた。ボーイにカウンターかテーブルかと聞かれ、テーブル席を頼むとカップル用の隣り合わせに座る席に案内された。先ず麻子が奥に座った。賢は少し躊躇したが、ボーイが注文を待っているので止む無く腰掛けた。麻子はブリュームーンカクテル、賢はジンライムを頼んだ。
「内観さん、わたしね、こういう処に来るの独身の頃以来よ。あなたは？ああそうだ、あなた、奥さんは？」
「僕は独身ですよ。結婚しようとしている人はいますけど。麻子さん、僕と一緒にこんな店に入って大丈夫ですか？」
「大丈夫って、どういう意味？誰かに見られないかっていうこと、それとも、亭主にぶたれないかってこと？それとも・・・・」
「ええ、あなたが後で困らないかって思って・・・心配なんです」
「内観さん、わたし、こんなに浮き浮きした気持ちになったのは独身の

頃以来なの。結婚した時でもこんな気持ちにはならなかったわ。お見合いだったから・・・あなたのこと名前で呼んでもいいかしら」
ボーイがブリュームーンカクテルを持って来た。麻子はそれを一気に飲み干し、その場でもう一杯注文した。ボーイが２杯目を持って来ると、麻子はカクテルグラスをいきなり口に持って行こうとした。
「そんなに勢いよく飲んだら、酔い潰れますよ」
賢は麻子のカクテルを持つ左手を押さえた。麻子は口元まで持って行った手を下ろし、カクテルグラスをテーブルの上に置いた。賢が手を引くと、今度は麻子がその手を握り替えした。
「賢さん、愛子はとても優しかったのよ。あなたみたいに。いつもわたしを労ってくれたわ。わたしが亭主にぶたれると、いつも泣いて亭主を止めてくれたの。あの子我慢していたのよ。あの子が居なくなった日も、わたし、あの馬鹿亭主にぶたれたの、あの子、声を出して泣いたのよ。その後で、消えてしまったの・・・・・あの子にはあまり小遣いをあげられなかったけど、その僅かな小遣いを貯めていて、わたしや亭主の誕生日、それにわたくしたちの結婚記念日には必ず何か買ってくれた。わたしが病気の時や、亭主に蹴られて苦しくて泣きながら床に伏せている時、あの子が枕元で「お母さん、元気出して」って言って看病してくれると、どっちが親だか分からなくなったわ」
そう言いながら麻子は賢の手を握り締めたまま自分の腿の上に持って来た。麻子の腿は柔らかかった。
「家の風呂は狭いから２人で入るのはきついんだけど、よく愛子が一緒に入ってくれたのよ。わたしの身体はね、痣だらけなの。あの子は、あちこちの痣を指で押したりして「おかあさん、ここいたくない？」って言いながらわたしの背中を流してくれたのよ・・・あいつはわたしを抱く特も乱暴なの、わたしは痛いだけで、何の喜びも感じないのよ。結婚したばかりの頃はそれも男の逞しさだと思ったわ。だけど、ひと月もすると、あいつはあれをするだけじゃなくて、乱暴するようになったの、わたしは愛子を身篭ったのを知ってから、あいつを避けるようにしたわ。何とかお腹の子と、自分の身を守りながら、あの子を産み落として、そ

れからはあいつからあの子を守るように育てて来たの。あいつにとって、わたしは雌だったのよ。いつも、いきなり乱暴に押し倒されて、されたのよ。少し抵抗するとぶたれたわ」
麻子は涙を浮かべた。賢は左手でハンカチをとり、麻子の涙を拭ってやった。麻子は賢の胸に顔を埋めて、声を忍ばせてすすり泣いた。余りにも麻子が哀れで悲しく、賢も涙をこらえる術を失くした。少しして、麻子は顔を上げると、
「わたし、愛子が戻るまで、もうあいつのところには帰らない」
「でも、生活費はどうするの？」
「賢さん、賢さんですよね。ねえ、わたしを助けて」
「わかった。愛子さんが戻って来るまで、俺があなたを支えてあげる」
賢は躊躇無く応えた。それしか麻子を救う方法は無さそうだった。目に涙を一杯溜めて、麻子がいきなり賢に口づけし、身体を賢の胸に預けた。賢は麻子の両肩を掴んで、身体を引き離して言った。
「麻子さん、ひとつ約束してください。愛子さんが戻るまでご主人の下（もと）に戻らないとしても、ご主人を許してあげること、そして、ご主人の良いところを思い返し、どこか自分に非が無いか、もう一度、自分を見つめ直してみること」
「わかったわ」
麻子は力弱く応えた。
「愛子さんに、何か癖はなかった？」
「癖って言えるかどうか分からないけど、時々ぼーっとしていて、話し掛けても何も応えないことがあったわ。暫くすると大きく息を吐いて、それから目をぱちぱちさせて普通に戻るのよ」
「そのこと、とても参考になります。今まで、失踪した人たちは皆同じような癖を持っていました。愛子さんが以前、急に居なくなったことはありませんでしたか？」
「一度、おやっと思ったことがあるわ。家は広くないから、あの子の勉強部屋は無いの。あの子は奥の４畳半の部屋に机を置いているのね。わたしはできるだけあの子が一人で勉強できるように、あの部屋には入ら

ないようにしているのよ。いつだったか近所の人からメロンを貰ったから、それを切って皿に載せて奥の４畳半に入ったのよ、そしたらさっきまでいたあの子の姿が見えないの。「おやっ」と思って、あちこち探したのよ、狭い家だからあちこちって言ったって、くるりと一廻りするだけで直ぐにどこに誰がいるか分かるんだけど、愛子ね、どこにも居なかったの。トイレの中を覗いたり、風呂場を覗いたりしたけど、居なかったわ。わたし、きっと気が付かないうちに外に出掛けたのだと思って、メロンの皿を盆に載せて、あの子の机の上に置いておこうと思ってもう一度４畳半に入ったら、あの子が机に向かって勉強していたのよ。わたしは、どこに行っていたのか聞いたのよ、でもあの子は、ずっと勉強していたって言うの。わたしは自分がどうかしちゃったんだと思ったわ。だって、あの子はとても利発な子だったから、変なことを言うはずはないと思ったの。でも、どうしても、腑に落ちなかったわ。今思うと、あの時のこともあの子の失踪と関係があるかも知れないわね」
「ほかの失踪者にも同じようなことが起きているんです。ところで、愛子さんが失踪した時に同時に無くなったものはありませんか？」
「いいえ、勿論着ていた洋服もろともに消えてしまったわ。家の中だから靴は履いてなかったけど」
「いろいろ参考になりました」
少ししてふたりは、更にカクテルを１杯ずつ注文した。麻子はそれから、あまり口を利かずに、身体を賢の左肩に凭れ掛けて、右手でブリュームーンのカクテルグラスを翳（かざす）すように持って、ちびりちびりと飲んだ。麻子は賢の右手を握りしめて自分の腿の上に押しつけている。
「賢さん、あなた血液型は？」
「Ｂ型。あなたは？」
「わたしもＢ型よ。誕生日は１１月２３日。もうじき３５歳になるわ。もう、おばあさんね」
賢は祐子と同じ誕生日だと思った。
「いいえ、あなたはとても綺麗だ。特に今日は美しいよ。もっと、自信を持っても大丈夫」

それは世辞ではなかった。賢は薄暗がりの中で、目に一杯涙を溜めて愛子のことを話す麻子の顔がとても美しいと思った。鼻筋が通り、口はおちょぼ口で、目は一重だが丸みを帯びている。少し下ぶくれの顔を自分に近づけている麻子の身体から、石けんの香りがする。昨日の香水は付けていなかった。

「愛子が戻るまでね・・・ずっとこのままでいたい・・・だめだめ、あの子が早く戻らなくちゃだめ・・・・・」

麻子は独り言のように言った。昨日の荒んだ姿は跡形も無く消えていた。

ふたりはパブを出た。９時を回っている。麻子は少し賢に凭れ掛かり、賢は麻子の肩を支えながら歩いた。ホテルまでは５分と掛からなかった。麻子の部屋は５階の中程にあった。賢は先ず麻子を部屋の前まで送った。麻子は部屋に入る前に賢に抱きついた。賢はそっと麻子の手を解き、「おやすみなさい」と言って、麻子が部屋に入るのを促してから、自分の部屋に戻った。部屋に戻ると賢は携帯を手にして祐子に電話を掛けた。

「あなた、待っていたわ。どうだった？」

「今まで、愛子のお母さんと話をしていたんだ。愛子さんは優しい中学生だったようだ。家庭が荒んでいるようで、何とか修復して戻りたいと思っているんだ」

「気を付けてね」

「ところで、そっちは何か変わったことはある？」

「ゆきさんからあなた宛に手紙が届いているわ。わたしたちにも来たの。お礼を言っていたわ。それに今日、新宿の早瀬由美さんの勤めていた会社に行って来たわ。あの方、会社では平凡な方だったようね。会社の同僚だった女性に会って話を聞いたんだけど、あまり人付き合いの無い、大人しい性格の人だったようね。いつも本を読んでいたようよ。詩を書くのが趣味だったようね。仕事は普通にこなしていたみたい。明日は早瀬由美さんの家に行ってみるわ。また報告するわね。おやすみなさい。あなた、好きよ」

祐子はいつものように、あなた、好きよという部分はやっと聞き取れるような声で言った。賢は携帯電話を切って窓際にある小テーブルの上に

置くと、小バッグから「失踪事件調査ノート」を取り出してその横に置いた。トラベルバッグから下着を取り出すとシャワーを浴びることにした。ビジネスホテルなのでバスタブは無くシャワールームもユニット形式であまり広くない。シャワーを浴びるとアルコールが抜けたような気分になった。下着を着替え、ランニングシャツ１枚のままテーブルに置いてあるノートを広げた。愛子のページを開き、麻子から聞いた今日一日の情報を書き取った。やはり酔いは醒めていない。ベッドにどっと身を投げると、そのまま眠りに落ちてしまった。八丁池の畔を祐子と共に歩いている時、電話の音で目覚めさせられた。頭を振ってもまだ酔い加減なのでそれほど時間が経っていないと思った。
「もしもし、わたしです。賢さん、身体が苦しくて・・・・どうしたら・・・いいか」
「麻子さん、直ぐに行きます」
賢はトラベルバッグから薬類の入った袋を取り出して、ズボンとシャツを身につけると、急いで麻子の部屋に行った。部屋の鍵は掛かっていなかった。賢は部屋に入って、鍵を掛け振り向くと、麻子がタオルを素肌に巻き付けた状態で床にしゃがみ込んで、顔をベッドの脇に埋め、「うん、うん」唸っていた。
「麻子さん、どうしたんですか？」
「賢さん・・・・背中がくるしい・・・・息が・・くるしい・・・くるしい・・・・」
賢は麻子の肩に触れた。身体が冷たくなっている。アルコールの影響だと思った。賢は麻子の脇の下を抱えて身体をベッドの上に仰向けに寝かせた。麻子は苦しそうに唸っている。顔面蒼白である。賢は「まずい、直ぐに体を温めなければいけない」と思った。顔も、タオルから出ている肩も、足も、冷たかった。賢は直ぐにツインのもう一つのベッドから毛布をはぎ取り麻子のタオルを外して裸にすると毛布で麻子の身体を剳るんだ。そうして置いて、タオルを手にしてシャワールームに行き、湯を出した。なかなか湯が出てこない。少し焦りが生じたが、漸く熱湯が出てきた。賢はできるだけ十分にタオルに熱湯を浸み込ませて、熱さ

を堪えてそれを絞った。その熱いタオルを持ってベッドに戻ると、麻子は呻き声は出さなくなっていたが、呼吸が細く小刻みに震えている。唇が紫色だった。賢は麻子から毛布を剥いで、唖然とした。麻子の身体は全身痣だらけだった。賢は素早くタオルを広げ、それを少し振って、肌に触れても大丈夫な程度に冷ましてから、麻子の身体を首から腰まで覆った。麻子が少し反応して、身体を動かした。賢はそうして置いて、もう一度シャワー-ルームに行き、タオル掛けからもう一枚のタオルを取り、それに熱湯を滲みこませ、同じように絞って、今度は腰から足にかけて覆った。賢はタオルをそのまま掛けておき、麻子の顔を両手で擦った。少し血の気が戻ってきた。賢は今度は膝から足の裏にかけて力を込めて擦った。暫く擦ってから、タオルで剞るんでいた右腕を出してマッサージし、摩った。左手も同じように摩った。タオルが少し冷めて来たので、２枚とも取りのけて再び毛布で身体を剞るんだ。賢はこれを３回繰り返した。３回目にタオルを取り除いたとき、麻子は頭を上げて、
「ありがとう」
と言った。顔色は元に戻り、呼吸も正常になっている。賢は麻子の額に右手を当ててみた。体温が戻って来ている。
「苦しくないか？俺が悪かった。お酒を飲ませるんじゃなかった」
「いいえ、お酒の所為じゃないわ。お風呂に入る時、時々こんな風になることがあるの。わたしの体、見たでしょ。痣だらけで汚いでしょ」
「痣は、きみの所為じゃない。きみの身体は綺麗だよ。子供を産んだことがある身体のようには見えないよ」
「少し暖かくなったけど、まだ芯が冷たいの。寒いわ。もっとあたためてください」
賢はタオルの間から手を入れて麻子の腹部に触れてみた。確かにまだ、芯が冷たい感じがする。再び麻子の額に触れてみた。先ほどの暖かさがまた、少し冷たくなってきている。賢はシャツとズボンを脱いで下着だけになると、裸のままの麻子を起こしてシャワールームに連れて行った。湯を加減してから、麻子をシャワーの下に立たせ、左手にシャワーハンドルを握り、背中から身体に湯を掛けてやった。背中もあちこちに黒ず

みがある。暫くシャワーの湯を掛けていると麻子が身体をくるっと回転して賢に前を向けた。賢はシャワーの湯を胸から乳房に、そして、腹、腿にと掛けていった。賢の下着は湯が跳ねかかりびしょぬれになった。ブリーフが身体に張り付いて賢の体の線がはっきり見える。賢は右手で麻子の額に触れてみた。大分体温が上がってきている。賢はもう一度麻子に背を向けさせて、掌で麻子の背中を撫でながら流した。麻子がぴくっと身体を動かしたのが分かった。暫くそうして流していると麻子がいきなり、前を向いて賢に抱きついた。賢の下着は水でびしょ濡れになった。賢は一旦麻子の身体を引き離すと、興奮を堪えて、右手で麻子の身体を撫でながら流した。麻子も興奮して来ているのが分かった。麻子は再び賢に齧り付いて来た。もう、麻子の身体が十分に暖かくなったと思って賢は急いで湿ったタオルを手にすると一旦、シャワーの湯で暖めてからコックを閉め、タオルを絞った。そのタオルで麻子の身体を前から拭った。もう一度タオルを絞り、今度は背中を拭った。身体を屈めて麻子の腿から足まで拭った。

「ベッドに行って、すぐ毛布に包まって」

賢が言うと、麻子は賢をじっと見つめてからベッドに向かい、言われる通り毛布に潜った。賢はびしょ濡れになった下着を絞ってタオル掛けに掛けると、自分ももう一度シャワーを浴びた。身体が冷え切っていた。濡れたタオルで体を拭い、その濡れたタオルを腰に巻き付けてベッドの脇に行くと、麻子が毛布から手を出して賢の手を握った。賢が麻子の毛布を取り除くと、麻子の全裸の体が再び目に飛び込んで来た。麻子の身体は全身黒ずみだらけだ。賢は黒ずみの部分を順番に右手でそっと擦っていった。全部で２０カ所ほどあった。大きな黒ずみが右の乳房の下にある。そこは危険な部位だと賢は思った。右の掌をそこに充てて、気を送るように意識を集中した。暫くじっと手を当てていると、麻子が首を持ち上げて、

「暖かくなったわ。もう大丈夫よ」

と言って、握っていた賢の手を引いた。

賢は抵抗しなかった。ふたりは愛の淵に沈んだ。

・・・・・・・・
「大丈夫、今日のことで、あなたには迷惑は掛けないわ」
「・・・・愛子さんをこの世界に戻そう。絶対に戻すから心配しなくていいよ。今の君はとても綺麗だよ」
そう言って賢は麻子の唇に口づけた。麻子はベッドから降りると、旅行用バッグから下着を出して身に付けた。
「身体は大丈夫か？痛いところはないか？」
「大丈夫よ。とってもいい気持よ」
１２時を回っていた。賢は薬袋から腹痛薬、頭痛薬、風邪薬を取り出して麻子に渡し、気分が悪くなったら服用するように言った。賢が濡れたランニングシャツとブリーフを履いてシャツとズボンを身につけると、麻子が、
「ありがとう。あなたを愛してしまったわ。わたし、幸せ」
と言った。賢は麻子の額に口づけをしてから自分の部屋に戻った。部屋に戻ると直ぐに新しい下着に着替え、濡れた下着をタオル掛けに掛けてから、ベッドに潜り込んだ。賢はどうして自分は直ぐに女性を好きになってしまうのだろうと思った。しかし、それは女性だけではなかった。出会う人と直ぐに深い関係を作ってしまう。それもこの人生でのこと、まあいいかと思った。
翌朝目を覚まして、身繕いを整えていると、ドアをノックする音がした。麻子だった。ドアを開けると麻子が入って来て、いきなり賢に抱きついた。賢は優しく麻子の肩を抱いて、口づけを交わした。麻子は激しく賢の唇を求めた。暫く舌を絡め合ってから、賢はそっと麻子を離して、
「おはよう。身体は大丈夫？」
と聞いた。
「うん」
麻子は賢にかじり付いた。賢は麻子の感情が静まるまでそっと肩を抱き締めていた。賢はそっと麻子の髪を撫でた。麻子はパーマネントも掛けていない。昨日まで乱れて、荒れている思った髪も艶が出て素直に垂れ下がっている。

「わたし、どうしましょう。もう、あなたから離れたくない」
そう言うと、麻子は顔を賢の胸から上げて、瞳を見つめた。まるで、若い娘のようなあどけない瞳に涙が潤んでいる。昨日まで目の周りにあったクマが取れ、麻子の顔は美しく輝いていた。賢は見る度に麻子が美しくなってきているのを感じた。
「一緒に朝食を摂ろう。今日は愛子さんの好きだった場所を訪れてみようと思う。それに、君にはきついかも知れないが、夕方俺は君のご主人に会ってみるよ。愛子さんを引き戻すには君と、ご主人の両方の力が必要だと思うんだ」
賢の体から身を引いて、麻子が言った。
「あいつ、変な宗教に嵌っているから、ちょっとやそっとじゃ説得できないわ」
「うん、何とかやってみるよ。俺は、君とご主人の二人が同時に意識を愛子さんに集中させないと、愛子さんは戻れないと思うんだ」
朝食の間、麻子は時々上目遣いに賢を見つめて溜息を吐いた。麻子は女の色気を感じさせた。ホテルを出ると、賢は麻子に導かれて紀ノ川に架かった橋を渡り、向こう岸の畔を歩いてみた。そこは愛子がよく一人で散歩したところだと麻子が言った。
「あの子は、わたしたち夫婦が喧嘩したり、亭主がわたしをぶったりしたとき、泣きながら家を出てここに来ていたのです。・・・そうだ、もし、あの子が一番好きな場所を選んで戻って来るなら、ここがその場所だと思うわ」
「いつもどの辺りを歩いたんだろう」
「ほら､あそこの土手を男の人が歩いているでしょう｡あの辺りを･････」
そう言いながら麻子は言葉に詰まった。
「あいつよ。賢さん、ここから戻りましょう」
ふたりは急いで、今来た道を戻り昨日のあすかみちに入った。ここは朝から開いている。モーニングサービスのトーストとエッグを注文した人たちが何人か居た。皆サラリーマンの様だった。ふたりはできるだけ目立たない席に座った。

「ご主人もあそこに来ていたんですね。今日は仕事は無いのですか？」
「そんなことはないと思うけど、わたしが出て行って少しは応えたのかしら」
「戻ってあげられますか？」
「いいえ、わたしはもうあの人の所には戻りません。愛子が戻れば別ですけど。・・・それに、今は、わたしの中にはあなたがいるのよ。もう、どうすることもできないわ」
麻子は辺りを気にしながら小さな声で言った。
「俺には、結婚を考えている人がいるんです」
「そんなこと、どうでもいいの。わたしは今、ここにあなたと一緒に居るだけで・・・・今日は、どこかに連れて行ってくれないかしら？どこか誰も分からない遠くに」
「今何時？」
「９時よ」
「分かった。直ぐチェックアウトしよう。そしてふたりで誰も分からない場所に行こう」
二人は急いであすかみちを出てホテルに戻ると、直ぐにチェックアウトした。１０時１０分前だった。ふたりは荷物を全部持って和歌山線、関西本線と乗り継ぎ、奈良に着いた。駅を降りるとふたりは人目を意識しながらトラベルバッグから洗面用具と下着を取り出して、麻子が用意していた小さな手提げに詰め込み、麻子のハンドバッグ、賢の小バッグ以外はコインロッカーに入れた。麻子は駅に降り立った時から賢の左手に自分の右手を絡ませた。賢は駅の旅館案内で宿を一部屋だけ予約した。奈良公園にほど近い旅館だということだった。賢はパンフレットを受け取ると、早速旅館に電話を入れ予約の確認を取った。
「賢さん、わたし、あなたのこと、あなたって呼んでもいいかしら」
「うん、ここにいる間だけ」
「あなた、わたしずっと以前に一度長谷寺に来たけど、もう一度行ってみたいの」
「うん、いいよ」

ふたりは電車を桜井線の桜井駅から近鉄大阪線に乗り換えて長谷寺に向かった。電車では並んで座った。桜井線のワンマン電車は先頭車両付近を除いて空いていた。ふたりは後方の車両に乗った。麻子は賢の手をしっかり握って離さない。時々その手を自分の腹の辺りに押し当てた。麻子は賢の耳許で囁くように
「あなたの赤ちゃんが出来るといいわ。わたし、一人でも育てる。わたし、生まれて来て良かった。あなたに逢えたもの」
賢は麻子を哀れで愛おしく思った。自分は罪な人間だと思った。しかし、麻子を愛していることは間違いのないことだった。どうして、何人もの女性を同時に愛せるのか自分でも不思議だった。長谷寺の参道前の通りには様々な土産物店が並んでいる。賢は麻子に簪を２本買ってあげた。一本は落ち着いた感じのもの、もう一本は一寸派手目の簪を選んだ。長谷寺の長い回廊の階段を麻子は賢の左手に纏わり付いて歩いた。
「わたし、一度簪を髪に飾ってみたかったの。今迄一度も着物を着たことないのよ。あっ、そうだ七五三の時に母が着せてくれたことはあったわ。覚えてないけど、昔の写真があるの。あなたにわたしの着物姿を見てほしいわ。愛子にも一度も着物を着せてないの。わたし、愛子とお揃いの着物を着てみたいわ。その時にこの簪を刺すわ」
麻子は簪を袋から出して髪に当てて見せた。
「わたくしたち、家族４人で生活するのよ。小さな家でいいわ。あなたが毎朝、わたしにキスして会社に出掛けるの。会社から帰って来ると、わたしに「おまえ綺麗だよ」って言っておでこにキスをするのよ。そして、愛子には「お前はいい子だなお父さんの自慢だよ」って言うの。それから赤ちゃんを抱きかかえて、頬ずりするの」
「＊＊＊＊＊」
長谷寺はしっとり落ち着いた寺だった。麻子は長い回廊を苦にもせずに上った。回廊は三九九段もあると立て看板に書いてある。回廊に吊されている大きなボタンの様な灯籠が気品を添えている。ふたりは舞台造りになっている南面入母屋造本瓦茸の大殿堂の本堂まで回廊を登ると、左手に本殿があった。本尊の十一面観世音菩薩の安置されている拝殿には

トンネルを潜るように堂内に入って参拝した。御身丈およそ１０m程の楠木の霊木で造られている我国最大の木造仏であった。薄闇りに輝く燻し金の御尊像で、右手には錫杖と念珠、左手には蓮華を挿した水瓶を持ち、方形の石の上に立っておられる。世にいう長谷観音と称せられる御尊像で、拝観しているだけで慈悲の雨に打たれている様な心の静まりを覚え、心が洗われる想いがした。外舞台から眺める境内は紅を過ぎて褐色に移りゆく紅葉で彩られていて、麻子はこのままふたりで浄土に赴きたいという誘惑にさえ駆られてきた。十一面観世音菩薩を拝観してから、ふたりは丘の上の小道を五重の塔まで進んで、戻り、本殿入り口の端にある札所の売店に寄った。賢は麻子と愛子の為にお守りを買って麻子に渡した。麻子は自分でも一つお守りを買った。
「これは内緒よ」
と言いながらお守りを自分の腹に当てて、暫く瞑目してから３つまとめてハンドバッグに入れた。
「わたしね。もし、全てうまくいかなくても、とても幸せなの。もう、どうなってもいいと思っているわ。わたしの中にあなたがいるのよ。わたしは一人じゃないわ」
「麻子、今日の君はとても綺麗だ」
賢は本心からそう思って囁いた。麻子の心が輝いているのを感じた。麻子の瞳に涙が溢れてきて、ひと滴零れ落ちた。長谷寺を出ると麻子は次に薬師寺を見たいと言った。薬師寺まではまた電車を乗り次いで、西の京駅まで戻らなければならなかった。ずっと離れた２つの寺の間に、何か麻子の心を惹く共通性があるのかと賢は思った。薬師寺は修学旅行の小学生で賑やかだった。均整が取れて美しい東塔を眺めながら、麻子は言った。
「わたしね、高校３年の夏に休学したのよ。身体の具合が悪くて、通えなくなってしまったの。一年遅れて何とか高校は卒業できたわ。今はもう大丈夫だけど。本当はね、大学にも行きたかったの。でも両親が許さなかったわ。身体が続かないっていう理由だったの。高校の頃、何もいいことなかったわ。みんな友達がいて、いつもわいわい楽しそうだった

けど、わたしはとても寂しかった。身体が弱いって、誰もわたしに近付かなかったの」
「どこが悪かったんだ」
「誰にも言わないでね。あなた以外の人にわたしの身体のこと言われたくないの。わたし、肝臓が悪かったのよ。今は大丈夫だけど」
賢は麻子があれだけ酷く殴られていながら、弱音を吐かなかったのは、人に弱みを見せたくなかったからだと思った。
「あなたには何でも話せるわ。今まで、両親にもあの馬鹿亭主にも話してないの。あなたが大好きだからよ。あなたがわたしを大切にしてくれた初めての人よ。もちろん愛子はいつも心配してくれたけど」
薬師寺の中を賢の腕にぶら下がるようにして歩きながら、麻子は微笑んだ。
「あれだけ殴られた跡があるのに、本当にどこも悪くないのか？今日は、俺がおまえの身体を可能な限り治すよ。いいか、マイナスの思考は駄目だぞ」
「今はどこも痛くないけど、時々昨日のように身体が動かせなくなるの。体中の血が引いて行くようで息も苦しくなるの。今までにも１０回くらいあんなことがあったわ。こうして生きているのが不思議なくらいよ。わたしがああして苦しんでいる時は、あの馬鹿亭主に殴られないわ。それだけが救いよ。わたしが苦しみ出すと、こそこそ逃げて外に出て行ってしまうから、いつも愛子に介抱されていたの。でも今はあの子が居ないからとっても不安よ。痣の消えた時に病院に行ったけど、どこも悪いところは無いって言われたの。鬱病じゃないかって。それを聞いたあの馬鹿亭主は私が「具合が悪い」と言っても、「気の所為だ」って言ってまたぶつのよ。もっとも、近頃は身体の痣を見られたくないから、ずっと病院には行ってないけど・・・・」
賢は麻子を引き寄せて頭を抱いた。賢の目に涙が溢れてきた。
「ねえあなた、今日もやさしくしてね」
「うん、ずっとやさしくするよ」
「そうじゃないの。今日も優しく・・・・・・」

麻子は目を伏せて小声で言った。賢には最後の言葉は聞き取れなかったが、理解した。
「分かった」
賢は携帯で祐子と亜希子、そして数馬と亮子に「暫く帰らないから探さないで欲しい」というメールを入れた。「祐子と亜希子には自分を信じて待つように」というメッセージも付け加えた。メールを送信し終えると携帯の電源を切った。
「麻子、俺は愛子が戻るまで東京には帰らないよ。お前と一緒に居る」
ふたりは薬師寺の東塔の陰で強く抱き合った。小学生達が気付いてじろじろ見ている。賢も麻子も一向に気にならなかった。ふたりはそこからバスで奈良公園に戻った。麻子は賢に寄り添い、木々に覆われて薄暗い感じのする奈良公園の中を歩いた。雲間から時々洩れ陽が差してきて、光の当たっている木の葉がパッと浮き上がって見える。人慣れした鹿が寄って来るが、何も餌を持っていないと見るとさっさと遠ざかって行く。子供が二人、鹿の尾を掴もうとして追い駆けている。鹿も慣れたもので、少し走っては止まり、子供が近付くとまた走る。まるで子ども達が鹿に遊ばれているようだ。麻子はそれを見て、賢と顔を見合わせながら、からからと声を立てて笑った。賢は麻子の笑い声を聞くのは初めてだった。底抜けに明るい笑い声だった。
「あなた、賢太か賢子がいいわね」
「えっ。いや、麻代だろう」
「あら、いやだ、女の子は男親に似るのよ」
「そうか、じゃ、麻男か賢子だな」
他愛のない話にふたりは時々声を立てて笑いながら公園の中をのんびり歩いた。宿は奈良公園を出て、直ぐの通り沿いにあった。奈良小道旅館という名前の、まだ新しいあまり大きくない旅館だった。チェックインの時、賢は同伴者欄に妻と記載した。麻子は少し恥ずかしそうだった。チェックインカウンターにいる年配の男性と目が合ったとき、咄嗟に目を伏せた。胸がどきどきしてきた。こんな気持ちは今まで味わったことがないと思った。亭主との新婚旅行の時は何となく、気分が乗らなかっ

た。行動が粗野で優しさが無い亭主に何となく警戒心を持っていた。それに比べ、賢は麻子が幼い頃から心に描いていた理想の恋人だった。やさしく、逞しく、頭が良く、自分を愛してくれている。賢の背中に男を感じた。そう思うと顔が熱くなってくる。そんな自分に気付くと、更に顔に血液が充満してくる様だった。
「お食事は、お部屋に用意させて頂きます。６時から９時までとなっておりますが、何時頃ご用意致しましょうか？」
「７時でいいかな？」
そう言いながら賢は麻子の方を見た。麻子はまだ赤い顔をしている。小さく頷いた。
「７時にお願いします」
「承知致しました。お風呂は２４時間いつでもお入り頂けます。大浴場は１階の、この廊下を真っ直ぐ行った突き当たりになっております。お部屋の方にもございます。明日の朝食は６時から２階の大広間「公園の間」に、ご用意させて頂きます。では、ごゆっくりお過ごしくださいませ」
そう言うとフロント係は賢に鍵を渡した。案内係の女性の後に従って部屋に通されると、直ぐに２５歳前後の仲居が挨拶に来て一通りの説明をした。
「ようこそおいでくださいました。仲居の佐川と申します。只今からお部屋の説明をさせて頂きます。入り口の左手が洗面所と浴室になっております。お湯はいつでもお使い頂けます。ここがクローゼット、そしてこちらが浴衣と丹前でございます。旦那様、浴衣のサイズは大でよろしいですね。奥様は中でよろしいと思います。お食事は７時でございますね。お食事がお済みになりましたら電話でフロントにご連絡くださいませ。直ぐに片付けさせて頂き、床を延べさせて頂きます。非常口は廊下を出て右に真っ直ぐ行った突き当たりにございます。何か、ご不明な点、ご要望等ございましたら、フロントまでご連絡くださいませ」
賢が頷くと同時に、麻子は小さな声で
「よろしくお願いします」

と言った。仲居が出て行くと、麻子は立ち上がり部屋をあちこち見回した。窓からは林が見え、その奥が奈良公園に繋がっている。少し薄暗く見える林は、部屋全体に静けさと、落ち着きを与えている。窓の外をじっと見つめると、たった今降り出した小雨が外の雰囲気を次第に薄暗くしてきていた。
「いい部屋だね」
「はい、とても。・・・わたしお茶入れます」
麻子はテーブルの上に置いてある茶セットの前に座ると、右手で急須の蓋を取り、中を覗いて、茶葉を確認してから、左手で急須を持ち上げ、ポットの給湯口まで持って行ってポットの上蓋を押した。しかし、お湯は出て来ない。４つのボタンがあり、どれを押せばよいのか迷っているようだった。賢が麻子の横に近づいて覗いた。沸騰、停止、時間セット、停止解除と４つ並んでいる。賢は停止解除と書かれたスイッチを押した。麻子はふと、賢の体臭を感じて胸が早鐘のように打ち始めた。麻子はぼーっとして賢を見つめている。
「どうしたの？どこか身体の具合が悪いのか？」
「ううん。あなたが近くに来たから、どきどきしちゃって」
賢は、麻子の手から急須を取ってテーブルの上に置くと、両手で麻子の肩を抱き、唇に口づけた。麻子は目を閉じ、少し口を開けている。麻子は意識が遠くなるような感覚を覚えた。賢は麻子を離すと、テーブルの反対側に戻った。麻子は意識が戻ると目を瞬き、急須に湯を注いで蓋をしてから、湯飲みを２つ取り出した。ゆったりとした動作で右手で急須の柄を持ち、左手で急須の蓋を押さえて湯飲みに湯を注いだ。麻子は自分の動作ができるだけ上品に見えるように意識した。
「どうぞ」
湯飲みと、一緒に用意されていた煎餅を賢の前に差し出しながら、麻子は小さな声で言った。
「うん、ありがとう」
賢は煎餅を取ってガリッと齧った。ふたりは暫く目を合わせたり、逸らせたりしながらお茶を楽しんでいた。

「食事までに時間があるから、風呂に行こうか？」
「あなた行ってらして、わたしは後で入るわ」
「でも、時間があるよ。それに外は雨になってきたから、散歩もできないし」
「わたし、人に見られたくないの。だから・・・・」
「ごめん、そうだったな。じゃ、ひとりで行ってくるよ」
「ごめんなさい」
少しして、賢は浴衣に着替えるとバスタオルと手拭いを持って風呂に出掛けた。浴衣に着替える時、麻子は恥ずかしそうに目を伏せていた。賢は麻子の持っている純情さを可愛いと思った。ホテルの規模の割には湯船は大きかった。浴場から外に出られる様になっていて、そこに５０センチメートルほどの玄武岩を並べて縁取りした露天風呂がある。薄暗がりの中、水銀灯の光が露天風呂の湯面から立ち上る湯気と、小雨で霞んでいる植え込みをぼうっと浮かび上がらせている。賢は掛け湯を使ってから湯船に浸かった。まだ誰も入っていなかった。いつものように今日一日の反省を始めた。麻子はいつも賢に寄り添っていた。時々賢の顔を見上げては恥ずかしそうに目を伏せながら歩いていた。祐子の様に積極的に賢に身を寄せたりしなかったが、その喜びが賢の心に響くように伝わってきた。一日の反省が終わると、次にどのようにして愛子を呼び戻そうかと考えた。中川恭一と話して、麻子と中川恭一がふたりで同時に愛子に意識を集中し、呼び戻すことが最も効果的に思えたが、中川恭一が賢の提案に応じるとは到底考えられない。愛子の意識は自分の両親、両親の間の繋がりと愛情を希求しているようだ。そして、それが打ち破られ続けた絶望の淵から、別空間に身を移してしまったと考えるのが自然だと思えた。賢はふと、「自分が麻子と夫婦になり、父親としての愛情を愛子に向けられれば、愛子を戻せるかもしれない」と思った。夫婦になると言っても、形の上のことではなく、子どもから見た父と母にならなくてはならないと思った。「わたしのたいせつなもの」という詩が頭に浮かんだ。あの詩に出てくるおとうさまとおかあさまの夫婦のパターンを作り出す必要があると考えた。自分は思考で方向付けをして、意

識で夫婦での生活パターンを作る自信はある。だが、そんなことでも、麻子にはかなり難しいだろう。愛子が戻るまで同棲するという方法を考えてみた。しかし、毎日、部屋にごろごろしていては倦怠感が漂い、うまくない。朝起きて、麻子の作った朝食を二人で食べて出勤し、夕方帰って麻子の用意した夕食を食べ、家族の団欒を経て、夫婦の夜の営みをする。そういう生活を繰り返しながら、麻子の今の亭主への憎悪と恐怖の意識を変えて行くしかないのかもしれないと思った。そうする内に、愛子の望んでいた愛情溢れる家庭の意識が麻子の中に出来上がる。そうなるまでの間、麻子と過ごそうと心に決めた。賢は湯気に上げられて頭がふらふらしてきた。湯船から上がり、頭から水を浴びた。やがて意識がすっきりしてきた。賢は全身を洗って風呂を出た。部屋に戻ると麻子が浴衣に着替えて、窓際にある籐の椅子に腰掛けていた。賢は麻子の髪が濡れているのに気付いた。部屋に備え付けてある風呂に入ったようだった。賢はもう一つの籐椅子に腰掛けた。
「風呂、入ったのか？」
「ええ、お部屋のお風呂をいただいたわ。綺麗なお風呂よ。疲れが取れたわ」
「愛子のことだけど、今晩一度試験的に呼び掛けをやってみようと思う」
「呼び掛けって？」
「きみとふたりで意識を集中して愛子に呼び掛けるんだ。精神を集中して愛子を呼ぶんだよ」
「そんなことなら、わたしにもできるわ」
「うん。それを純粋な、混じり気のない心で行う必要がある。愛子の場合、両親の愛情が最も重要な要素のようだから、俺が父親として呼び掛けてみる。君は我が子に対していつも抱いている愛おしさで呼び掛けるんだ。本当は空腹時の方がいいんだけどね」
「食事までに１時間あるわ。今、少し教えてくださらない？」
「うん、それじゃ一寸畳の方に行こう。愛子の写真を持っていたね。それを出して」
麻子は籐椅子から立ち上がるとハンドバッグの置いてあるクローゼッ

トの所に行った。賢は麻子の湯上がりの香りを感じた。麻子はハンドバッグから取り出した１枚の愛子の写真をテーブルの上に置いた。その写真は愛子が一人で紀ノ川の川岸に立っている写真だった。眼鏡を掛けている。ふたりはテーブルの長手の側に床の間に向かって並んで座った。賢は写真をふたりの間のテーブルの中央付近に置いた。
「少しトライしてみよう。先ず軽く目を閉じて、少し瞑想をする。頭の中は完全に空っぽにする。空っぽにしようと思っても駄目だよ。何も考えない。それから、俺が今から愛子を呼ぶよと言うから、それに合わせて必死に愛子を呼ぶ。うまくいけばこの段階で光の様なものが見えて、次第に人の形になってゆく。そしてそれが近付いて来る。もし、愛子の姿が見えてもそのまま呼び続ける。本当にそこにいると感じるようになるまで呼び続ける。いいかい」
「ほんとうにできるかしら？」
「先ず、疑い、疑問を完全に無くさなくては駄目だ。俺を信じて、確実にうまくいくと確信する必要がある。少しでも疑問や疑いが混じったら、それでこの挑戦は失敗になる」
「分かったわ、やってみる」
賢の合図で麻子は瞑想に入った。暫くして、賢が「さあ、愛子を呼んで」と言った。ふたりは必死に愛子を思った。しかし、賢には何のイメージも浮かび上がらなかった。１０分ほどして、賢は静かに目を開けた。麻子はまだじっと目を閉じている。麻子の目頭に涙が溜まってきている。賢は思考を止めて麻子を見つめ続けた。やがて、麻子はパッと目を開けた。
「凄いわ。今ね、遠くに愛子の姿が見えたの。だから、必死に呼んだわ。でも、急に何かに引っ張られるように、愛子は遠ざかって行ってしまったわ」
「残念ながら俺にはイメージが現れなかった。意識が正しく愛子に向いていないんだな。勿論、愛子の意識も今の俺に向いているはずはない。君の方向には向いているはずだから、あとは俺が君の亭主の代わりになれるかどうかが鍵だな」

「わたしはいつでも大丈夫よ。あなたを夫として生きられるわ」
「いや、一緒に住んでも君の意識にいる今の亭主のイメージを無くさなくては駄目だ。君の心の奥に巣食っている、恐怖と嫌悪感を払拭する必要がある。それと、俺の潜在意識の中に君の亭主が抱いていた愛子への思いを植え付ける必要もある」
「あいつにそんなものあったかしら」
「いや、それは絶対にあったはずだ。この間の河原に佇んでいたご亭主を見てもそれは確かだ」
「そう言えば、あいつ愛子の髪を気にしていたわ。あの子の髪はあいつの髪に似ていたのよ。だから、時々あの子に「髪に艶が出てきた」なんて言ってたわ」
「他には何かご亭主が愛子のことを大切にしていたことはなかったかな？」
「それはあの子の優しさよ。誰だってあの優しさには参っちゃうわよ・・・」
その時、ドアがノックされ、仲居が「食事の準備をします」と声を掛けた。麻子は急いで写真をハンドバッグに収った。食事は並んで食べたいと麻子が言ったので仲居はふたりの席をそれまで座っていたように床の間に向けて用意した。仲居は米の櫃を置いてみそ鍋に火を入れてから、飲み物の注文を聞いた。しかし賢は断った。
「ではごゆっくり、お食事がお済みになったらフロントまでお電話ください」
そう言って仲居が立ち去ると、賢が窓側に胡坐をかいてすわった後で、その横に麻子が正座してすわった。
「それじゃ、いただこうか」
「はい」
麻子は茶碗にご飯をよそって賢に渡してから、自分の分もよそった。賢が「いただきます」と言って手を合わせると、麻子も真似て手を合わせた。
「あなた、いただきます」

初めに麻子がマグロの刺身を箸で摘むと、少し醤油に浸けて、賢の方に膝を向け、
「あなた、どうぞ」
と言って、賢の口元に差し出した。賢も麻子の方に少し身体を向けた。刺身皿には大根のツマの上にマグロと烏賊の刺身がそれぞれ２切れずつ盛られていた。麻子が初めて箸を付けた自分の一番好きなマグロの一切れを賢に差し出したので、賢は麻子の気持ちが嬉しかった。麻子は左手を賢の右腿に着いて、自分の身体を賢に近づけてから賢の口にマグロを入れた。賢は麻子の左手を握って、
「ありがとう」
と言って、自分のマグロの刺身を２枚同時につまみ、麻子の皿に移した。麻子がおしぼりを手にして、自分の浴衣の左腿の上を拭った。
「醤油垂れちゃった」
「後で着替えたらいいよ。まだ、そこに替えがあるみたいだから」
「大丈夫。ほら、落ちたわ」
しみが付いているかどうか確認しようとして麻子が浴衣の裾を摘み上げると、左の腿が露わになって、２つの痣が目に入った。麻子は急いで裾を合わせると姿勢を糺した。賢は目を逸らせて意識を食事に向けた。それから暫く、ふたりは意識的に料理の味や形などについて感想を言いながら食事を進めた。麻子は料理を口にする度に、「美味しい」「美味しい」と言った。賢は最後にデザートとして透明のガラス皿に盛られているキュウイフルーツを手元に引き寄せた。麻子は完全に賢と食事の同期を取っていたので、麻子も自然にキュウイフルーツを手元に寄せた。ホークで一切れを摘むと、麻子は身体を賢ににじり寄せ、顔を賢の前に突き出して
「はい、あなた」
と言ってキュウイを賢の口元に持って行った。賢はそれを口に含んでから、自分のキュウイをホークに挿して麻子の口元に近づけると、麻子は目を閉じて口を開けた。賢は可笑しくなって微笑んだ。賢はもう一度キュウイをホークに差して今度は麻子の唇に軽く当てた。麻子は少し唇を

突き出してそれを吸い込むように口に入れた。麻子が最後のキュウイを賢の口元に運ぶと、賢はそれを口に含み少し噛んでからぐっとひと呑みにした。賢はテーブルから身体を外すと、麻子の右手を取って引き寄せた。麻子は「あなた」と言って、足を投げ出して、賢の右腕に身を委ねた。賢は麻子の肩を抱き寄せた。麻子は目を閉じて、賢にしがみ付いた。賢は麻子をしっかり抱き締め、麻子の額に口付けをした。暫くの間ふたりは抱き合っていたが、やがて賢は静かに麻子を引き離した。麻子は開いている襟を直し、元の席に戻った。
「食事を片付けてもらおう」
「・・・え、・・ええ」
麻子は聞き取れないような小さな声で応えた。少しして、二人の仲居が来て食卓を片付け、テーブルを窓際に寄せて二人分の床を伸べた。ふたりは窓際の籐椅子に向かい合って腰掛けて居たが、その手際良さに目を見張った。仲居が「それではごゆっくり」と言って立ち去ると、賢が入り口のドアをロックした。麻子はまだ籐椅子に座っている。
「わたし、こんなに幸せでいいのかしら」
「今日は自分を苦しめてきた全てのものを忘れろよ」
「こんな素敵な旅館に泊まるの何年ぶりかしら。一度でいいから愛子を連れて来てあげたかったわ。今まで、一度もお泊まりで出掛けたことなかったの」
「連れて来たらいいよ。俺が招待してやる」
麻子は目に涙を浮かべて、籐の椅子を立つと、床の上に座った賢の身体に自分をぶつけてきて、ふたり一緒に倒れ込んだ。麻子は浴衣の下には何も身につけていない。賢は麻子がずっとそのままでいたのだと知った。
「何も身に付けていないのか？」
「女は裸でいるのが好きなのよ」
ふたりは激しく求め合った。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
賢が麻子の上で言った。
「この状態で愛子を思ってみよう。俺たちは今、繋がっている。君は意

識を俺と愛子に集中しろ、俺は君と愛子に集中する。いいか暫く瞑想して」
麻子は恍惚感の中で黙って賢を見つめ、頷いた。賢は瞑想しながら麻子と愛子を思った。そして静かに動いた。麻子は両手で賢の背中を抱き締めて、賢への思いで一杯になっている頭に必死に愛子の姿を思い描いた。時々、気が遠くなりそうになった。遠くに光が輝いた。その光が次第に近付いて大きくなってきた。光が人の形になった。愛子だった。麻子は必死に愛子を求めた。賢が必死に愛子を思い描いたとき、賢の脳裏にも遠くに光が映った。光は次第に近付いて来て大きくなり目前に迫った。その光がパッとはじけて人の姿が現れた。写真に写っていた愛子だった。賢は愛子を呼ぶ意識と、麻子を欲する意識を強め、もっとも深く入って、力の限り麻子を抱き締めた。麻子は喘ぎながらも、必死に愛子を呼び続けた。麻子の目の前に愛子の姿がはっきり見えた。その時ぱちっと音を立てたように光が煌めき、パッと愛子の姿が消えた。同時に賢の脳裏からも愛子の姿が消え去った。麻子は目を開けた。
「あの子よ。あの子が現れたわ。でも、ぱっと消えちゃった」
「うん、確かに現れた。でもだめだったのか。また消えちゃったな」
ふたりはそのまま、もう一度同じ状態を作ろうと努力したが、どうしてもできなかった。賢は静かに麻子から離れた。ふたりは脱ぎ捨てた浴衣を身に付けた。
「あなた、あの子また消えちゃった。どうしよう、どうしたらいいのかしら」
「まだ始めたばかりだ。これからも続けてみよう。愛子を俺たちの前に出現させる為には何かが足りなかったんだろう。多分、俺に問題があるんだと思う。俺には愛子の現れ方があまりリアリティを持って感じられなかった」
「わたしには、もう目の前にいるって感じだったわ。もっとも目を瞑っていたからそう思っただけかも知れないけど」
「兎に角、一度君の亭主に会ってみるよ。愛子への思いを確認してみる。君の亭主が愛子の帰還への思いが無くて君への暴力も続けるようだっ

たら、君は直ぐに離婚をした方がいい。もし彼が反省して君と愛子を労る様だったら、君はまた彼の元に戻れるか？」
「わたしは、もうあなたを愛してしまいました。でも、わたしはこの２日間でもう、一生分の人生を生きました。もう何も恐れません。わたしの中にはあなたが居ます。ですから、愛子がそう望めば、わたしはあいつの元に戻れます。愛子を育てる為に」
「俺も同じだ。君を妻として生きることができる。君が望めば、いつも一緒にいる。たとえ君が去っても、いつまでも君は俺の中にいる・・・明日和歌山に戻ろう、そして何もかもはっきりさせよう」
賢はもう一度麻子の帯を解いた。麻子は賢が何をしようとしているのか分からなかったが、身体を開いた。賢は自分の気を高める動静站樁（たんとう）の動作をしてから、丹田に気を集め、それを両掌に移した。麻子は賢の動作を只うっとり見つめていた。賢は麻子の両肩を抱いて仰向けに床に横たえ、一面に附いている痣に一つずつ掌を当てて、麻子の細胞に語り掛け、許しを請うて、およそ８分間ずつ瞑想をしていった。身体の前を終えると、麻子を腹這いにさせ、背中の痣についても同じように瞑想と祈りを行った。一通り瞑想を終えると、賢は右の乳房の直ぐ下の大きな痣に再び触れた。そのとき、麻子は「うっ」と唸った。賢はそこに掌を当てて、１５分間ほど健康状態への復帰を祈った。
「あなたの手、とっても暖かい」
賢は麻子の身体にそっと浴衣を掛けると、両手で肩を抱いて自分の胸に抱き寄せ、そこで再び祈った。
「おまえの身体のことは全て分かった。これから３日、夜の１０時頃から、おまえの身体の悪い部分が治ったことを想起して瞑想する。必ず痛みが去って痣も全て消える」
「＊＊＊＊＊」
瞳から一筋涙が流れ、麻子は声を上げて泣き崩れた。
翌日の昼過ぎに、ふたりは麻子の家の門を潜った。麻子が引き戸を引くと中から男の声がした。
「誰ですか？」

麻子が応えた。
「わたしよ」
勢いよく襖を開けると、中川恭一が怒鳴った。
「おまえ、どこに行っていやがった！おれは飯も食えなかったじゃないか。亭主を何だと思っていやがるんだ！」
「おとうさん、やめて！」
麻子は驚嘆した。愛子の声だ。麻子はいきなり靴を脱ぎ捨てて、家に駆け上がると、いきり立っている中川恭一には目もくれず、襖の陰に居る愛子の処まで走って行って抱き締めた。
「愛子いつ戻ったの？よかった！」
「おかあさん、わたし、昨日の夜川岸にいたの。よく分からなかったけど頭がぼーっとしていて、自分でも何が何だか分からなかったわ。だって家にいたはずなのに、気が付いたら裸足で川岸に居るんだもの。頭がふらついていたけど、急いで家に戻って来たの」
「お前が、勝手に家を出ていやがるから、俺はどうしたらいいか分からなかったじゃないか！馬鹿が、どこに行っていやがった！」
「おとうさん、やめて」
「あなた、やめてよ！また、愛子が消えちゃうじゃないの！」
「えっ、わたし消えていたの？どういうこと？　わたし、今日は頭が痛くて、気が付いたらお昼過ぎだったの」
「あなた、この子に何も食べさせていないの？」
「うるせえ！お前が居ないから、どうしていいか分からなかったじゃないか。馬鹿野郎！」
中川恭一が手を振り上げた。その間に愛子が割って入った。
「おとうさん、やめて！ああ、頭が痛い・・・・」
成り行きをじっと見守っていた賢が口を開いた。
「中川さん、麻子さんを殴るのはやめてください！」
その声に、中川恭一は玄関の方を振り向いた。
「あんたは誰だね。余計なお世話だ。人んちのことに口を挟まんでくれ！」

「いいえ、今日はあなたにお話があって来たのです。わたしは麻子さんの友達の内観賢と申します」
「おまえ、人の女房を連れ出したな。そんなことをして只で済むと思っているのか？！」
「あなた、内観さんは関係ないわ。わたしは、自分であなたから逃げたのよ。だって、あのままここにいたら、殺されちゃったじゃないの」
「きさま、大袈裟なことを言いやがって！てめえがだらだら生活していたのが悪いんじゃないか！俺が何をしたってんだ！」
「おとうさん、やめて！ああ、頭が痛い」
「愛子大丈夫？・・・あなた、大きな声を出さないで、愛子、こっちに来て横になりなさい」
「少し、静かに話しましょう。愛子さんは戻って来たばかりで、それじゃなくても身体が衰弱しているはずなんですから」
中川恭一も麻子も黙った。賢は静かに話し始めた。
「昨日の夜、愛子さんが戻ったということは大変なことです。愛子さん、あなたは１年前に食事の途中、この家から失踪したんですよ。そして、昨日紀ノ川の川岸に戻ったのです。今、一番大事なことは、二度と消滅しないように自分の意識を固定させることです」
「わたし、１年間も消えていたの？自分が家の中から突然川岸に移ってしまって、頭がとても痛いということしか分からないわ」
「詳しいことはこれから説明します。今は、意識を安定させてください。あなたがご両親を慕っていたのはよく知っています。お父さんもお母さんもここに居ます。安心してください。麻子さんは直ぐに愛子さんに食事を用意してあげてください。この現実に定着させる為には、ものを食べるのが一番手っ取り早いでしょう。それから中川恭一さん、あなたは心を落ち着けてください。今、愛子さんが戻って来たんです。おふたりを祝福してあげてください」
麻子は奥の部屋に床を延べてそこに愛子を寝かせると、直ぐに立ち上がり奥の台所に向かった。冷蔵庫の中にはそのまま食べられるものは何も無かった。

「わたし、何か買って来る」
そう言うと麻子は財布を持って外に飛び出して行った。賢は玄関先に立ったまま、中川恭一に話を続けた。
「中川さん、わたしは麻子さんから話を伺いました。あなたに殴られたり蹴られたりして、身体がおかしくなっているって言っています。愛子さんが戻った今、もう二度と麻子さんに手を出さないと約束してください。そうしないと、本当に麻子さんの身体は持ちませんよ」
「あんたにそんなことを言われる筋合いはない。出て行ってくれ」
「いいえ、いま、麻子さんが戻って来ます。その時、はっきりさせましょう。もし、あなたが、それを約束しないのでしたら、麻子さんはあなたと別れるって言っています」
「きさま、女房に焚き付けたな。貴様、そんなにあの女が欲しきゃくれてやる。分かれてやる。俺だってあいつのだらだら生活には嫌気が差しているんだ。だがな、おまえのやったことは地獄に通じる道だ。人の女房を拐かしやがって、六道輪廻の轍の中に落ちる。仏の救いを求めることだな。もともとお前のような卑劣な奴も救われているんだ。ありがたく思え」
奥の部屋から愛子の声がした。
「おとうさん、お母さんに優しくして、お願いだから・・・・」
愛子は涙声で訴えた。
「おとうさん、分かれるなんて言わないで。お母さんが可哀そうよ」
愛子は麻子にとって離婚が大変なことだと思っているようだった。
「内観さん、お父さんを責めないでください。おとうさんはきっと優しくしてくれます。わたし、分りました。わたしが消えたのは、わたしがお父さんとお母さんの喧嘩から逃げ出したかったからだと思うの。そんな気がするわ。わたし、もう絶対に逃げない」
そこに麻子が戻って来た。ハアハアと息を切らせている。
「愛子、パンと、お蕎麦と、牛乳と、おにぎりと、お寿司と、お菓子と、プリンと、それにアイスクリームも、一杯買って来たわよ。それと、熱があると困るでしょう。角の薬屋さんで頭痛薬も買って来たわ。頭はま

だ痛む？」
「おかあさん、大丈夫よ。大分良くなったわ。おかあさん、ここに居て」
「ごめんね。何がいい？おまえ、お寿司好きだったわね」
麻子は涙声で言った。
「うん、お寿司ちょうだい・・・」
麻子は床から身体を起こしている愛子に寄り添って食事の世話を始めた。
「おかあさん、お父さんと別れないでね。おとうさんはきっと優しくなるから。ねえ、お父さん、お母さんに約束して」
「・・・わかったよ。お前に言われちゃ、俺も、こいつのこと我慢するさ」
「この子は、いつからそんなに強くなったの。お父さんに意見なんかしたこと無いのに」
「わたし、もう逃げないことにしたの、さっき決めたのよ。わたしが弱かったから、みんなを悲しませてしまったんだもの」
「愛子、内観さんにお礼を申し上げて。あなたが戻るよう一生懸命努力してくださったのよ。内観さん、わたしはこのままこの家に戻ります。後のことは心配しないでください。本当にありがとうございました。今度のことは死んでも忘れません」
麻子の声は震えていた。賢には麻子が涙を堪えているのが分った。
「内観さん、ありがとうございました。本当にありがとうございました」
愛子は２度礼を言った。
「女房もああ言っているから、もうお引き取りになってください。いろいろお世話になりました」
中川恭一が素っ気なく言った。
賢は土間に投げ出してあった麻子のトラベルバッグを持ち上げて玄関の上がり口に置いて言った。
「差し出がましいかも知れませんが、これから大変です。先ず警察に報告して、それから学校に連絡して、できたら愛子さんは転校させた方がいいかもしれません。１年遅れましたし、いろいろ質問攻めに遭います

から。それに、報道関係の方が押し掛けて来るでしょう。愛子さんを守ってあげてください。ここにわたしの携帯電話の番号を書いたメモを置いておきます。困ったことがあったら連絡してください。わたしは今、休職中ですからいつでも相談に乗ります。中川さん、二人の女性を大切にしてやってください」
「分かったよ。しつこいな。もう、あんたの助けを借りることは無いよ」
中川恭一が強く突き放すように言った。賢が玄関の扉を閉める時、奥から目に涙を溜めた麻子の顔が見えた。賢も目頭が熱くなったが、思い切って半開きの玄関の扉を閉め切った。
それから賢は再び駅前のビジネスホテルを予約して、２日間和歌山に留まった。カメラマンの後ろに隠れて朝からずっと麻子の家を見守った。凄まじい取材攻勢だった。翌日の１０時過ぎに３人が揃って警察に出頭した。事情聴取の報告会が始まっておよそ３０分後に、愛子がパトカーで病院に運ばれた。体力回復と健康診断という名目だった。中川恭一と麻子に対する事情聴取はその後、２時間半に渡って行われた。ふたりは疲れた顔をして警察から出て来た。賢は警察の入り口のパトカーの横に立って様子を見ていたが、麻子が賢に気付いた。麻子は何も言わず、ほんの少し会釈をして警察を後にした。外に出ると、ふたりがカメラマンや記者に取り囲まれていた。中川恭一は必死に受け応えしている。麻子はほとんど口をきかず、分かりませんと応えている様に見えた。その日のテレビニュースのトップにこの事件が取り上げられていた。中川恭一の得意げな話が何度も出て来た。しかし、話している内容は要を得ないものだった。麻子も登場したが、うつむき加減に唯、「愛子が戻って嬉しいです」という言葉と「詳しいことは分かりません」という言葉を繰り返しているだけだった。ホテルに置いてある新聞も１面のトップニュースとして取り上げていた。タイトルは「失踪から１年、無事帰還。原因不明のまま」となっている。愛子が入院した日、麻子と中川恭一は病院に入りっ放しになった。賢は食事を済ましてからホテルに戻ると、簡単にシャワーを浴び、携帯電話の電源を入れた。５通の着信履歴があった。留守番電話に伝言が入っていた。祐子と亜希子からだった。祐子か

らは電源を切ったばかりの時とその後に３通、亜希子からは電源を切った日の夜に掛かっていた。いずれも賢を心配しての電話だった。賢は先ず祐子に電話を掛けた。
「賢さんですか？お電話待っていたわ。無事だったのね。良かったわ」
祐子の近くに誰か居る。
「新聞読んだわよ。こっちでも大変な騒ぎよ。賢さん、愛子さんの復帰に関係したんでしょ」
「うん、少しね」
「だけど、ニュースでは賢さんのこと何も言っていないわ。勿論、鹿児島の事件を引き合いに出して、時々説明しているけど」
「帰ったら話すよ。もう少し見守ってから帰るから」
「分かったわ。今あのレストランよ。皆いるわ一寸替わるわね」
祐子は仲間と一緒に居た。
「賢元気か、俺だ数馬だ。お前が変なメッセージを送って来たから、皆心配したぞ。またどこかに消えてしまうんじゃないかって、祐子や亜希子さんなんて可哀想なくらいおろおろしていたぞ。もっと友達のことを考えろよ」
「悪かった。こっちも切羽詰まった気持ちだったんでな。ところで、新しい事業の方はどうなった？」
「うん、おかげで、藤代肇さんの会社と連携してシステムプロジェクトに入札できそうだ。登録企業のリストには載せてもらえたよ。世話になったな」
「俺は何も世話してないよ。みな藤代肇さんのおかげさ。良くお礼を申し上げろよ」
「うん、分かった。じゃ、亜希子さんに替わるぞ」
「もしもし、亜希子です・・・・・」
亜希子は声が詰まって言葉が出ない。
「亜希子さん、心配掛けてごめん。今、精神面は安定しているのか？」
「はい・・・・わたくし、お姉様と一緒に暮らすようになって・・・以前よりずっと元気になりました。今は不安定な状態になることもありま

せん・・・・賢さんがおられない間、早瀬由美さんのことを調べました。いろいろなことが分かってきました。こちらに戻られたらお話しします」
「それは楽しみだね。あと少しこっちに居てから帰るから、また皆で集まろう」
「はい、楽しみにしています。では、亮子さんに替わるわ」
「もしもし、亮子です。賢くん、元気だった？今度のこと、テレビや新聞で大騒ぎよ。今までこんな形で失踪事件が解決したのは、民話に出てくる神隠しに遭った人の帰還しかないでしょう。誰も居ない紀ノ川の畔に現れるなんて。復帰した理由が分からないから、どのテレビ局も新聞社も、何とか原因を探りだそうと必死だわ。愛子さんのお父さんのお話、よく分からないのよ。辻褄が合わない時があって、それに、愛子さんのお母さんは何を聞かれても「帰ってきて嬉しい」「よく分かりません」の連発で、皆もう呆れているわ。一寸変なのよね。愛子さんのお父さんは何か宗教団体に入っているようで、そこの教義と現実が混同しているみたいなの。あまり嬉しそうな感じがないのに、お母さんの方は、いつもにこにこしていて、嬉しくて仕方ないって感じよ。インタビューの最中でもにこにこ、しかもぼーっとしていてまるで痴呆症の人みたいに見えるわ。賢くんもテレビ見ているでしょ」
「いや、俺は愛子さん達の後を追って帰還後を観察しているから、ほとんどテレビは見ていないよ。大変なんだ」
「電話替わったわ。賢さん、一度、テレビを見てみて、両親の反応に違和感を感じるから。あのふたり、しっくりいっていないんじゃないかって思えるの。お互いの目を見ることもないわ。あの状態が愛子さんが失踪した原因に関係しているんじゃないかって気がするわ。それに、少し前に起きた失踪事件なのに、賢さん、あなたと亜希子さんのことがほとんど報道されていないのも妙な気がするわ」
「俺は、報道されない方がいいよ。全国的に顔を知られてしまったら、これからの調査なんかで不便をきたすからな。それより祐子、今亜希子さんが、早瀬由美さんのことに進展があったようなことを言っていたが、何か分かったのか？」

「そう、いろいろ分かったわ。早瀬由美さんって、会社じゃあまり目立たない存在だけど、どうやら、秘密結社に絡んでいた様なの。魔術的なことに凝っていて、錬金術みたいなことや、物質の消滅、移転、出現なんかの現象に挑戦していたみたいなの。なんか不気味な感じがするの。あまり、深入りしたくない感じよ」
「そうか、そのこと帰ったら詳しく話してくれよ」
「分かったわ」
「それじゃ、これで電話を切るよ。みんなによろしく言ってくれよ」
「早く帰って来てね」
賢は電話を切った。テレビを点けて、ニュースを報じているチャンネルを探すと、民放で丁度愛子の失踪の特集を組んで放送しているところがあった。中川恭一が映っていてインタビューに応えていた。
「わたしは、宇宙の根源の仏に帰依していますから、愛子が戻って来るのは当然の結果と思っています。あの子は優しい子で、わたしのような不出来な親には勿体ない子です。過去の六道輪廻の中で沢山の功徳を積んできたのだと思います。わたしが一身に法華経を唱え続けることで、娘は本来の仏の相を表してこのように救われたのです」
「娘さんは、戻られた時どんな状態でしたか？」
「あの子は、大好きな紀ノ川の川岸に戻ったのです。いつもあそこに行っていましたから。夜だったので、そのまま家に戻って来たようです。その時はぼーっとしていたようで、わたしが家にいるのをごく普通のことのように感じていたようです。ただ、自分がなぜ河原に行ったのか分からないと言って、布団を敷いて直ぐに寝てしまいました」
それから、普段の生活や、愛子の趣味などについて質問が続いていたが、中川恭一はあまりはっきりした応えはしていなかった。続いて、麻子へのインタビューがあった。賢は麻子の姿を目にすると暑いものが胸に込み上げてきた。
「お母さん、愛子さんが戻られたことについて、感想をお聞かせ頂けますか？」
麻子は喜びに満ちた顔をしていた。微笑みながら応えている。

「わたしは、あの子が戻って来てとても幸せです」
「愛子さんは戻られた時、どんな様子でしたか？」
「わたしは留守にしていましたので、その時のことは分かりません」
「愛子さんが消えて仕舞われた時のことを話していただけますか？」
「確か食事中だったと思いますが、よく覚えておりません」
「その時、何か変わったことに気付きませんでしたか？」
「良く覚えていません」
「愛子さんはどこにいたのか､心当たりはありませんか？そしてどうして戻って来たのかについて、考えられることはありませんか？」
「わたしには分かりません」
賢は麻子が自分の方を向いて微笑んでいて､自分と視線が合ってふたりで見つめ合っているように思えたが､それが録画されたテレビの放映であることを考え､あり得ることかと少し思考を巡らそうとした。しかし､じっと麻子の目を見ていると､愛おしさが押し寄せてきて思考を遠くに追いやってしまった。特別番組はキャスターの「愛子さんは果たしてどこに居たのか、そして、なぜ戻って来ることができたのか？謎は深まるばかりです」という説明で終わった。賢はテレビを切って、精神状態を安定させる為に暫く瞑想を行った。麻子の全身のイメージを描いて、痣の一つずつに照準を当てて祈り､それが治癒してゆく様子をビジュアル化していった。およそ２時間の間、意識を集中し続けた。疲労感が押し寄せてきた。賢は知らない内に眠りに落ちていった。
翌日も朝食を済ますと、賢は麻子の家に向かった。家に近付くと、周辺は既に多くのカメラマンや記者と思われる男達でごった返していた。中川恭一が出て来て
「仕事に行くんで、どいてください」
と言いながら、男達を掻き分けて出て行った。何人かのカメラマンが後を追った。それから１０分ほどして麻子が現れた。玄関の鍵を閉め、記者達に向かって、
「娘に会いに行きますので、道を空けてくださいませんか？」
と言いながら、バス停の方に向かって歩き出した。四、五人のカメラマ

ンが後を追った。賢は道路脇で麻子を見送った。麻子は家を出た時から、賢に気付いているようだった。賢の近くに来て、軽く頭を下げて微笑んだ。賢も会釈を返した。麻子はそのままバス停に向かった。賢も後を追って、カメラマン達に気付かれないように同じバスに乗り込んだ。カメラマン達は直ぐに停車しておいた車に戻って行った。後を追うつもりの様である。幸い、そこでバスに乗ったのは麻子と賢だけだった。バスには既に１０人ほどの乗客が乗っていたが、座りにくいタイヤ部分の２人掛けの席が空いていた。麻子が奥に腰掛けると、賢は並んで座った。

「大丈夫か」

麻子は黙って頷いた。そして、人に見られないように意識しながら、賢の手を握った。麻子の瞳に次第に涙が溢れて来た。

「辛いのか？」

麻子は小さく首を振った。麻子は微笑んで賢の手を強く握った。ふたりは病院の前でバスを降りた。賢が最初に降りて、続いて二人の女性と一人の男性が降り、麻子は意識して最後にゆっくり降りた。病院の前には既に記者達が大勢来ていた。麻子は直ぐに記者に取り囲まれたが、それを押し分けるようにして病院に入って行った。記者達はまるでバリアでもあるかのように、病院の入り口で立ち止まり中には入って行かなかった。賢は暫く病院の近くを巡ることにした。麻子は愛子の個室の病室に入った。愛子はベッドの上に上半身を起こして腰掛けテレビを観ていた。

「愛子、おはよう」

「おかあさん、おはよう。来てくれたの？わたしはもうすっかり元気よ」

「頭は、ぼーっとしなくなった？」

「うん、もうすっきりしているわ。きのうの検査結果が今日出るんだって。問題なければ明日退院できるわ」

「愛子、何か食べたいものない？」

「ううん、別にない。それより、テレビにお母さん達が出ていたわ」

「そうよ、記者会見とやらで大変だったわ。でも、お母さんは何も知らないから、何を聞かれても分からないって応えたけどね」

「おかあさん、本当はわたし、あの川岸に現れた時にね、お母さんとお

父さんが一緒にわたしを呼んでいたように感じたの。あの時、お母さんとお父さんと、わたしがまるで抱き合ってでもいるような感覚だったわ。とても嬉しかった。だから直ぐに家に戻りたかったの。でも、必死に歩いて家に着いたら、お父さんが居たけど、なんかわたしを呼んでいたお父さんとは違う人のように感じたの。それにお母さんが居なくて悲しくなってきたから、直ぐに布団を敷いて潜り込んだの。お母さんが帰って来た時に一緒だった内観さんは一体誰？何だか、わたし、あの人のことずっと前から知っていたような気がするの。内観さんを見ると、何か安心できるような」

「愛子が戻って来る前、お母さんはあの家を出ていたのよ。その時、お母さんを守っていてくださったのがあの方なのよ。あの人、自分でもあんたと同じような体験をなさっているのよ。１ヶ月くらいの間だけど消えていて、内観さんと一緒に消えてしまったお嬢さんのお母さんと内観さんのお友達がふたりで、強く呼び戻す瞑想をしたんだって。そしたら、内観さんとお嬢さんは戻って来れたんだって。だからね、それと同じようにお母さんと、内観さんがふたりで瞑想してあんたのことを呼んだのよ。ずっと呼んでいたわ。そしたらお母さんの頭の中に愛子の映像が現れて、あんたが戻って来たと確信できたの、でもあんたが見えた瞬間、パッと光って消えたのよ。多分、その時に愛子は河原に現れたんだと思うわ」

「お父さんは一緒じゃなかったのね。そうよね。あんなにお母さんを虐（いじ）めていたんだから、一緒になってわたしを呼ぶなんてことできないわよね・・・・でも、内観さんがお父さんに話してくれたおかげかしら、わたしが戻ってから、お父さんはお母さんをぶたなくなったわね。それだけでも嬉しいわ」

「お母さんね、お父さんとはもう一緒に生きられないのよ。お母さんとお父さんとの間には絶対埋められない深くて広い溝が出来てしまったの。あなたを育てていかなければならないから、同じ家で生活してはいくけどね」

「おかあさん、わたしのことは心配しなくていいわ。お母さんの人生で

しょ。好きでない人と一緒に生活する必要はないわ」
「お母さんは、愛子が卒業して就職するまで我慢するから、心配しなくていいのよ」
麻子は賢への思いについて愛子に覚られないように注意した。２時半を過ぎて麻子が病院を出ると既にカメラマンや記者の姿は無かった。麻子がバス停に向かって歩き始めた時、ビルの陰から賢が歩み寄って来た。
「愛子さんは元気になったか？」
「あっ、待っていてくれたの？」
「うん。君が心配でね。食事はした？」
「ううん、まだ。あなたは？」
「君を待ってたんだ。一緒に食べよう。駅前にお寿司屋さんがあるから」
ふたりはビジネスホテルの横の路地裏にある寿司屋に行った。一人の客も居なかった。ふたりはカウンターを避け、角のテーブル席に座った。賢は上寿司を２人前注文した。麻子にトロを食べさせたかった。
「あなた、わたしは家に戻るわ。あなたは帰って。もう、あなたはいつもわたしの中にいるわ。だから、わたし大丈夫よ」
麻子は一瞬悲しそうな顔をしたが、直ぐに笑顔に戻った。賢は自分のトロを麻子のすし桶に載せた。麻子もいくつかの寿司を賢に寄越した。ふたりは言葉少なく寿司を食べ、店を出てバス停の方向に歩き始めた。麻子は賢に身体を寄せ、賢の左手を握った。賢は麻子の手をぐっと引いて引き戻しバス停とは反対方向のビジネスホテルに向かった。麻子はおとなしく腕を引かれて着いて来た。３時半を過ぎていて、ビジネスホテルのカウンターには人影は無かった。賢は麻子の手を引いたまま、自分の部屋に入って、ドアをロックした。ドアをロックすると同時に、麻子が賢に抱きついた。二人は激しく求め合った。
「あなた見て、あざが全部消えたわ。あなたのおかげよ。好きよ。好き、大好き」
二人は無言で激しく求め合った。賢は麻子を抱いて激しく動いた。麻子は何度も泣き声にも似た歓喜の声を上げた。ふたりは相手と一つに溶解したことを意識した。ふたりは暫くそのまま抱き合っていたが、賢が麻

子の上で言った。
「おれ、愛子が退院するのを見届けてから東京に戻るよ。おれが帰った後、困ったときはいつでも連絡しろよ」
「あなた、わたし幸せよ。このままずっと一緒にいたい・・・・・こんなにあなたに愛されて、わたしもいっぱいあなたを愛してしまったもの」
そう言うと、麻子は賢の背中に回していた腕に力を込めて、身体を思い切り引き付けた。
麻子は５時には家に帰った。分かれる時、賢は封筒に入れた５０万円の現金と愛子の日記に自分への連絡方法を書いたメモを添えて麻子に渡した。
「このお金は必要な時に使えよ」
「いけないわ。あなただって大変でしょう」
「いいから取っておけよ」
賢は、いつか麻子は離婚するだろうと思っていたが、そのことには触れなかった。その時の生活の足しにと考えて現金を渡したのだった。麻子は帰りのバスの中で、まるで夢の中にいるようで、家の玄関を潜るまで時々溢れ出て来る涙をその度にハンカチで拭った。家に着いたときには、麻子は中川恭一と分かれることを心に決めていた。できるだけ早く仕事を探そうと思っていた。
翌日の午前１０時頃、愛子は無事退院した。病院を出る時は麻子が付き添っていた。中川恭一の姿は無かった。病院の入り口にはカメラマンや記者が大勢集まっていて、ふたりにフラッシュの雨を浴びせた。チェックアウトを済ませた賢はトラベルバッグを路上に置き、カメラマンに取り囲まれて何やら受け応えしているふたりの姿をビルの陰からじっと見つめていた。麻子は愛子を促してバスに乗る時、暫し佇んで賢の方を見つめた。
賢は紀ノ川のほとりに出た。河口の方角から冷たい風が吹き付けてくる。賢はジャケットの襟を立てた。河口まで歩いてみようと思った。歩を進めるに従って、風の冷たさが身体の芯にまで沁み込んできた。頬は冷たさを通り越して痛ささえ感じる。時々猛スピードで屎尿処理車が賢を追

い越してゆく。「何故こんなにスピードを出すのだろう？」賢は自分に問い掛けた。悲しみが胸の底から湧き上がってくる。賢は頬が濡れているのに気付いた。目が風の冷たさに耐えられないのかも知れない。あるいは意識の奥にある麻子への想いが、そうさせるのかも知れない。左手に和歌山城の外堀に繋がる市堀川が現われた。何艘もの小型漁船が岸に繋がれている。麻子の辛い生活が始まる。中川恭一が麻子に対して暴力を振るわないことを祈るしかない。「自分はこのまま東京に帰ってもよいのだろうか？」賢の心は逡巡した。その時、市堀川の川岸から数十羽の鳥が一斉に飛び立った。「麻子は大丈夫だ」そう自分に言い聞かせてみても心の奥の悲しみは癒えない。滔滔と流れる紀ノ川と海鳥の憩う市堀川に挟まれた道路は、風の通り道にもなっている。身体が冷え切って、手もすっかりかじかんでしまった。やっとのことでループ状のアプローチのある青岸橋の下に着いた。ループを上がると赤いアーチの橋の上に出た。ここで左手に紀ノ川に架かる紀ノ川河口大橋と繋がっている。橋の上に吹き付ける風は思ったほど強くなかった。青岸橋の中央から眺める紀ノ川と市堀川、そしてその右手に広がる和歌山城の城下町の街並みが美しい姿を見せてくれた。江戸時代にはここを紀州の蜜柑を積んだ帆船が行き来していたはずだ。この美しい景色を望むことのできる橋の周りには屎尿処理場や製鉄所などがある。寒さで鈍感になっているはずの鼻にも感じられる臭気が、賢にはあたかも自分の不如意な生き様を醸し出しているように感じられた。

賢が永代のマンションに着いたのは、午後７時を廻った頃だった。がらんとした広い部屋に入ると直ぐに賢はトラベルバッグから衣類を取り出し、それをバスタブに投げ込んだ。それから洗剤を取り出して振り掛け、水を満たして足で踏み洗いして、濯いでから浴室に張ってあるロープに掛けた。洗濯を終えると、シャワーを浴びた。これでこの旅は終えたと感じ、寝室に入ってベッドに身を投げた。暫くぼーっと天井を眺めていたが、ふと意識を戻して再び居間に戻り、トラベルバッグを開けた。さっきは気付かなかったが携帯の着信ランプが点滅していた。賢は先ず、２冊のノートとペンを取り出して、ダイニングテーブルの上に置いた。

それからゆっくり携帯を取り出してみると、祐子と亜希子から１通ずつメールの着信とメッセージがあった。賢は昨日から携帯がトラベルバッグの中に入れっ放しになっていたことを思い出した。まず、祐子の２通のメッセージを聞いた。
「賢さん、祐子です。連絡が取れないので、あとでメールします」
「賢さん、亜希子です。いつお帰りになりますか？ご連絡いただけたら嬉しいです」
続いてメールを見た。
「あなた、いつ帰って来るの？とっても心配しているわ。毎日、あなたが元気なのか、何をしているのかと考えると不安で眠れないわ。早く帰って来て」
「賢さん、暫くお会いしてないのでとても寂しいです。祐子お姉様がいてくださるので、以前よりは心強いですが、やはり夜になると賢さんのことを考えてしまい、なかなか寝付けません。早く帰って来てください」
二人とも同じメッセージを別々に送って来ていた。賢は先ず祐子の携帯に電話を掛けた。
「あなた、待っていたのよ。酷いわ、全然連絡くれないんだもの。今、どこ？」
祐子の声には泣き出しそうなのを堪え、意識して強く話している様子が伺えた。
「マンションに戻ったところだよ」
「今行くわ、でも少し時間が掛かるけど」
「うん、いろいろ話したいことが一杯あるよ」
「３０分くらいで行くから待っていてね」
そう言うと祐子は電話を切って直ぐに家を出た。出掛けに家政婦に、友達の所に出掛けて、今日はそこに泊まるかも知れないから心配しないようにと伝えた。
賢は祐子への電話を終えると直ぐに亜希子に電話した。
「もしもし、賢さんですか？お帰りなさい。電話いただけて嬉しいです。ご無事でお帰りになられて、ほっと致しました」

亜希子の声は明るかった。本当に嬉しそうに話している。
「亜希子さん、元気そうだね。電話やメールありがとう。返信できなくてごめんね」
「いいえ、賢さんがお戻りになられただけで、わたしはとても嬉しいです。明日、皆さんと一緒にレストランに伺います。お話楽しみにしています」
「それじゃ、おやすみ」
「おやすみなさい」
３０分ほどして祐子がセーフティゲートに現れた。祐子は急いで飛び出したのでマンションの合い鍵を持って来るのを忘れた。ゲートはセキュリティＮｏを入力して、鍵を挿入しなくては通れない、厳重なセキュリティ構造になっている。賢はインターホンの応答に出た時少し悪戯をした。
「どちら様ですか？良く聞こえませんが」
「わたしよ、わたし」
「わたしってどなた様でしょうか？」
「わたしよ、祐子よ、祐子」
「どちらの祐子様ですか？」
「えっ、あらいや、わたし間違えちゃったかしら。済みませんでした」
祐子は再びキー入力し直した。
「すみません、祐子ですが、賢さんのおたくですか？」
「祐子か、今すぐドアを開けるよ」
入り口のドアを開けると祐子が蒼白な顔をして入って来た。賢は自分が冗談半分にした悪戯に戦慄を覚えた。
「あなた・・・・お帰りなさい」
賢は祐子に近づいて、いきなり抱きしめた。祐子は持って来た布バッグをぽとりと落として、賢の肩に顔をうめた。
「祐子、連絡を絶ってごめん。愛子さんを救う為に必死だったから」
「うん・・・・今日、泊まってもいい？」
「いいに決まっているじゃないか」

賢の肩から顔を持ち上げて力無く祐子は言った。
「あなた、寂しかったわ。あなたがどこか遠くに行ってしまったように感じていたのよ。いつもと違うの。とても寂しく感じたの。今も、あなたがいるのに、なぜか寂しいのよ。今日はうんと優しくしてね」
いつしか、祐子の目に涙が浮かんでいる。賢は祐子への愛おしさが次第に強くなって来るのを覚えた。これまで、麻子のことを思っていた自分が、今祐子のことを愛おしく思っていることを不思議に思ったが、また思考に惑わされていると感じて、思考を止めた。賢は祐子の髪を優しく撫でた。
「祐子、おみやげを買って来たぞ」
「おみやげなんて要らない。一緒に居て。どこにも行かないで、暫くこのままじっと抱いていて」
「大丈夫、当分旅行はしないよ。お前を悲しませてしまったから」
ふたりは入り口で抱き合ったまま、じっとしていた。賢の身体に次第に、祐子の鼓動が伝わって来た。静かな祐子の息遣いがはっきり聞こえてくる。賢は祐子の身体を離して、頭を抱え口づけをした。祐子にはいつもの激しさがない。ただ恍惚として少し口を開いていた。祐子の目から涙の滴が流れ落ちた。賢は再び祐子を抱きしめた。祐子の脈が速くなってきたのが分かった。１５分ほどそのまま立っていたが、祐子の肩を抱きながらソファーに行って腰掛けた。
「あなた、全部お話しして」
「愛子さんが食事の間に消えたことは知っているよな。原因はあの家庭の夫婦間の不仲にあったようなんだ。亭主が奥さんに対して優しくなかったんだ。不満があると直ぐ暴力を振るっていたようだ。そんな様子を見て、愛子さんが地獄のような状況から逃避しようと強く思ったみたいだ。その念が強かったんで違う時空間に移ってしまったみたいだ。と言うのも、愛子さんはその家庭の状況とは全く正反対の家庭を望んでいて、そんな理想的な両親を夢見ていた様なんだ」
「そんな家庭は、一杯あるんじゃないかしら」
「うん。だけど、愛子さん自身に俺のような普通の人とは異なる特殊な

要素があったんだと思う。俺が愛子さんの家を訪ねたとき、奥さんは生きる意欲を失い掛けた危険な状態だった。それに毎日のように亭主から暴行を受けていたようだ。奥さんは鬱のような状態で、何もする気が起きない状態だった。それを、だらだらしていると言われて責められ、殴られたようだ。俺は奥さんに愛子さんが戻れる可能性があること、君がやってくれた方法を説明したんだ。そしたら、奥さんに気力が戻って来て、亭主の下（もと）から逃れようと家を出てしまったんだ。俺は彼女に愛子さんを復帰させる様に、呼び戻す為の瞑想をさせた。俺も一緒に、愛子さんの写真を前に置いて瞑想した。何回か挑戦して、遂に愛子さんは、大好きだった紀ノ川の川岸に現れて歩いて家に戻った。奥さんも俺もそんな風に愛子さんが戻っていることも知らずに、いろいろ話し合った末、家に行ったんだ。そしたら、愛子さんが戻っていたって訳。それから、おれは亭主に暴力を振るわないように言い聞かせた、次の日に３人が警察から事情聴取を受け、愛子さんが検査の為に入院した。どこも悪くなかったから、１日で退院できた。退院するまで見守ってから俺は帰って来た」
「あなた、その奥さんとずっと一緒だったの？」
「うん」
「・・・・・・わたし、あなたを信じている。あなたの心がわたしから離れてしまわなかったか心配したの」
「奥さん、麻子さんて名前だけど、彼女と一緒に居た時は、確かにあの人達のことだけしか意識の中に置かなかった。だから君には本当に済まないと思う。お前を連れて行くべきだった。もう二度とお前を意識から外さない」
「もう、今日はこれ以上あの人達のこと話さないで。悲しくなるから」
「分かった」
賢は祐子の肩を抱き寄せた。祐子は力なく賢に身を寄せた。
「あなた、早瀬由美さんのことだんだん分かって来たわ」
「この間電話で聞いたことも含めて、詳しく話してくれないか？」
「うん、早瀬由美さんって超常現象に興味を持っていた様なの。メスメ

リズムという催眠術みたいな方法でエクトプラズムとかいう心霊現象を起こすことなんかを目的に集まっている集会に、よく参加していたようなの。その会はあまり公になっていなくて、会が催された時、次の会の場所や日程が決められる、流動的な集まりみたいなのよ。わたしも亜希子さんも怖いからあまり深入りしないようにしていたんだけど、その中の一人の男性から電話があって、「興味があるのか」って聞かれたの。どうしてわたしの電話番号が分かったのか不思議だったし、気味が悪かったけど、思い切って早瀬由美さんのことを聴いてみたのよ」
「何て聞いたんだ？」
「「早瀬由美さんという人はそちらのメンバーですか？」って聞いたの。そしたら、「あの人は最近、会に参加していない」って言うの。だから、「どうされたのですか？」って聞いたら、「それは分からない」って言ってたわ。わたし怖くなってきて、「ありがとうございました」って言って電話を切ろうとしたけど、相手の男性が、「我々の仲間の一人が早瀬由美さんと一緒に実験をしていた」って言って、その実験について話してくれたわ。早瀬由美さんは物質転送の実験をしていたみたい」
「ふーん。どうも祐子や亜希子さんはあまり近付かない方がいいかもしれないな。俺が少し接近してみるよ」
「分かったわ。でも、気を付けてね」
「ところで、メスメリズムとかエクトプラズムっていうと霊的現象のことだよな」
「メスメリズムって、物質化現象を起こそうとする催眠術みたいなものよ。かなり昔に流行した降霊会で行われたもののようなの。それにエクトプラズムって、人間の周りにあるアストラル体という霊体を見えるようにしたものらしいわ」
「そうか、きっとそれは写像が創られるとき、映像化のプロセスで出来る歪んだ陰みたいなものなんだろうな」
「あなたが言うともっと分からなくなるわ」
「つまり実体のない映像さ、俺たちの生きているこの世界は実体のある映像ってところだ。実相の世界がこの世界に写像されて、俺たちは全て

を認識する為にその中に意識を持って生きている。この世界に転写が行われる時に、正しく映し出された形の陰が出来てそれを目で見えるようにしたものがエクトプラズムじゃないかな。人の想念で、この陰に歪みを与えて映像を作り出すことも可能だけど、それらには実体がない、とまあこういう訳かな」
祐子が賢の右手を掴んで、自分の腹部に押し当てた。
「あなた、ほら大きくなって来たわよ」
「えっ、本当か？」
「ほら、動いている」
「えっ、・・・またぁ・・今、動くわけ無いじゃないか」
「ふふふっ、ビックリしたでしょ。さっき、ゲートで意地悪したお返しよ」
「こいつめ」
賢は祐子をソファーに押し倒して、自分の身体を重ねた。
「きゃ、いや、ごめんなさい。いや」
祐子がはしゃいだように首を左、右に振った。賢は祐子の上に圧し掛かって、キスをした。
「あなた、だめよ、まじめに検討しなくちゃ」
賢はそのままの格好で、
「うん、早瀬由美さんはその会でどんなことをしていたのかな」
「想念で物質を動かしたり、消したりすることを実験していたようね。早瀬由美さんはそういう現象は霊が行っているって考えていたみたいなの」
「霊か、俺たちの廻りにはいろいろな霊体があるんだ。時々、それが見えるけどね。特にお前は、それが凄く輝くことがあるんだ。さっき、この部屋に入って来た時はほとんど輝きが無かったけど、今は少し輝き始めている」
「あなた、今日はうんとやさしく・・・して」
「うん、祐子おまえは美しいな。本当に美しい」
ふたりは寝室に移った。賢は衣類を脱いでいる祐子の姿を見つめた。美

しかった。以前ルーブルで見たミロのビーナス像より美しいと思った。胸まで垂れた長い髪は乳房に掛かっている。自分はこんな美しい女性を愛することができて幸せだと思った。祐子の身体の周りから光が発しているように賢には思えた。

「こんな美しいお前を一人にして、俺は何て馬鹿な奴なんだろう。お前以外に必要なものなんて何も無いのに、何を求めていたんだろう。もう、何も要らない。お前さえいてくれれば」

賢は祐子に近付き腰に両手を廻した。寝室には小さな窓が附いていて、周囲がクリスタルカットの厚手のガラスが嵌め込まれている。そのカットの部分に外からの光が当たって輝いている。暗い寝室の中で小窓から入って来る僅かな光に、祐子の身体がシルエットのように浮き上がり、不思議な妖艶さを感じさせる。

「祐子、暫くこのままでいてくれないか。お前の姿を見ていたら、身体が痺れて来て・・・」

「だめ、抱いて」

それからふたりはベッドに身を投げ無言で抱擁し合った。ふたりの間に時間の流れが無くなっていった。絶頂を越えると賢の激しさは治まり、それに連れて祐子への恋慕の心が増して来た。祐子の髪はとても力強く、それでいてしなやかだった。賢は祐子の額から側頭部に掛けて髪を撫で、ベッドの上に放射状に広がっている祐子の髪を一握りして、口づけた。

「祐子、久しぶりに一体になろう」

「＊＊＊＊＊」

ふたりは無言で瞑想状態に入った。祐子はなかなか意識が集中できない。突き上げるような強さが欲しかった。

賢は祐子の心の動きを見て取った。徐々に強さを増し、激しく動いた。祐子はうめき声を上げた。賢はそれでも激しく動いた。祐子は意識が遠のいていくのが分かった。祐子が悲鳴にも似た声を上げたとき、賢は再び頂上に達した。祐子は意識が無くなっていた。賢はずっと動かなかった。賢はそのまま祐子を抱き締めていた。祐子の両手も両足も力なくベッドの上に広げられている。やがて祐子はうっすらと目を開けると、足

を閉じながら両手を賢の背に回して賢を強く抱き寄せた。
「ねえ、朝までこのままでいて」
賢は少し眠気が差していたが、再び意識を引き戻して静かに動いた。
ふたりが気が付いた時は、朝の日差しが小窓から差し込んで来ていて、
ふたりは自分たちの姿を目の当たりにすることになった。
「あなた、もう一度強く抱いて」
賢は疲労感でまだ意識がはっきりしなかったが、自分たちが生々しい行
為の中にいることを動物的な感覚で感じて、眠さの中で動き始めた。し
かし、賢が果てるまでにそれほど時間は掛からなかった。賢は祐子の額
に口づけして静かに祐子から離れた。
「あなた、まだ、わたしは以前の自分に戻れない。今日もずっと一緒に
いてもいいでしょ。ううん、戻れるまであなたから離れないわ」
「うん、俺もお前と一体になり切れなかった。まだおまえを抱いていた
いけど、そうもいかないしな。みんなに会って報告しなくちゃいけない
し」
二人は無言で行動した。口を漱ぎ終わると、祐子は元の祐子に戻った。
急いでキッチンに向かい、朝食を作り始めた。暫くして明るい祐子の声
が響き渡った。
「あなた、朝食の用意ができたわ」
賢は寝室を清掃して、ベッドメイキングを終え、ベッドに腰掛けて瞑想
していたが、祐子の声で意識を現実に戻し、ゆっくり立ち上がって食卓
に向かった。
「祐子、ありがとう」
「さあ、あなたお食事にしましょ。今日はみそ汁とハムとご飯にしたわ。
ご飯は炊けたばかりだから、待ってる間お茶をいただいていてね」
そう言いながら祐子は湯飲みに茶を注いで、テーブルの上に置いてから、
椅子に座った。
「今日ね、ずーっと一緒にいるわ。家には戻らない」
「祐子、後で失踪事件のことをレビューしてみよう。俺は結論が出たら
お前と一緒に住む。お前と一緒に居る時が一番清浄なんだ」

「あなたでも異常になることがあるの？」
「いや、俺はお前を抱いているときも清いままでいられる。雑念が無くて、虚空の中にお前の存在しか見えない」
「やだ、そう言う意味なのね。・・・わたし・・あなたに抱かれている時ね、・・・身体が振動してくるような感じになるわ・・・清浄なのか濁っているのか分からないけど・・・他のことは頭の中から消えて、次第に意識が冴え渡ってくるの・・・でも、知っているでしょ・・・・あとはまるで自分が燃えてでもいる様な感覚の中に居るの。あらやだ、恥ずかしい」
祐子の頬が赤味を帯びてきた。
「二人が身体も、意識も、感覚も一つになったとき、・・・そう、前に一度そんな状態になったよな。凄い恍惚感の中に居たけど、あれが最終的な姿かな？」
「わたしはいやよ。あなたがいないといや。わたしは自分が無くなるなんていやよ。あなたとふたりでいるのがいいの、そこにあなたがいて、わたしが側にいる方がいい。いつも一つになりたいと求め合っているのがいい」
「無限に続く世界だな。きっと、まだ俺たちは究極の地点に至っていないんだよ。だから、お前はそう感じる。おれも今はお前を求めていることにこの上ない喜びを感じるし」
「あなた、ご飯もう大丈夫のようだからいただきましょう」
ふたりは朝食を食べ、祐子がそれを片付けてから洗面所で歯を磨き、ソファーに移った。賢の座っている横に身体を寄せて祐子は腰掛けた。賢は祐子の方を振り向いて、肩を抱きしめ口づけした。
「いいものを見せてやるよ。愛子の日記、というか詩集と謂った方がいいかな。まだ彼女が戻る前だけどね。それを書き写して来たんだ。愛子はとても純粋な心を持っていて、とても優しかったって」
賢はセンターテーブルに置いてある失踪事件調査ノートを開いた。後ろからページを繰ってゆくと、細かい字でびっしり詩の様な文章の書き付けられたページが現れた。そこから５ページほど書き付けられている。

普通のノートに書いたら４倍分ぐらいの量を縮めて書いてある。
「一寸小さい字で見難いかも知れないけどね」
そう賢が言うと、祐子は声を出して最後のページの文章を読み始めた。
「<わたしは鳥になりたい>
広い空の向こう
わたしの知らない島がある
青い海の向こう
風の吹かない島がある
海を波立てる輝く太陽
目を眩ませる白い砂
若者は木々を揺らせて歌い
娘は空高く舞う
男達は無心で働き
疲れ切って木陰に憩う
女達は無心で子どもを愛で
この世で一番おいしい料理を作る
今日は終わり
明日もまた陽が昇る
男達は無心で働き
女達は無心で作る
わたしは鳥になりたい
鳥になって
風のない島に飛んでゆきたい

夢のような詩ね。わたしも鳥になって、あなたとふたりでその島に飛んでゆきたいわ」
祐子はページを前に捲り、最初の詩を読んだ。
「<わたしのたいせつなもの>
わたしは小さなからすの子
おとうさまがやってきて

わたしを守ってくださるの
お母様がやってきて、
おいしい、お食事くださるの
・・・・・・・
・・・・・・・

この詩、可愛いわね」
「うん、子どもの頃に書いたようだな。この詩を読んで、愛子の望んでいるものが分かったんだ。それで瞑想して愛子を呼び戻すことができた」
「愛子さんの純粋さが伝わってくるわ」
「祐子が俺を呼び戻してくれた時と同じだよ。お前の純粋さと強い意識の働きで俺は戻って来れたんだと思う」
電話が鳴った。数馬だった。
「賢、戻って来たんだってな。亜希子さんに聞いた。今日は休みだから、午後、そう２時半、いつものレストランで会おう。勿論全員集まってな」
「うん、分かった。連絡絶って悪かったな。意識をここから切り離して集中したかったからそうしたんだけど。みんなに悪くて」
「うん分かってる。それより、今日は重大な報告があるんだ。絶対遅れるなよ。祐子にも伝えておいてくれないか。・・・そこに居るんだろう」
「う、うん、まあ・・・・兎に角分かった。必ず行くよ」
賢は電話を切った。
「何、何？ねえ、数馬君でしょ。何だって？」
「今日午後２時半に集まることになったよ。なんか重大な報告があるんだって。おまえがここに居ること知っていたみたいだ。伝えろって言ってた」
「あら、やだ」
祐子は顔を赤くした。賢が何気なく、祐子の太股に手を載せた。祐子はぴくっとした。そして馬場のことが頭に浮かんだ。しかし、馬場の時の反応とは異なる反応をした自分が恥ずかしかった。祐子は無意識に賢の手を握っていた。そして、心臓の鼓動が激しくなったのを覚えた。

「わたしね、原智明研究会で所長さんに、あなたみたいに腿の上に手を載せられたの、その時は反射的に自分の身体が凄い拒否反応を示したのが分かったわ。それが、あなただと逆なの。何も考えていないんだけど、面白いものね。身体も知っているのね」
「馬鹿だな、当たり前だろう。思考は脳が勝手に判断して出してくる反応さ。いまの反射的な行動は、意識が働いているからさ。お前は俺を愛しているじゃないか」
そう言って賢は祐子を抱きしめ、口づけをした。祐子は嬉しく、心躍る心地がした。
「あなた、いつ一緒に暮らせるの？」
「今直ぐにでもそうしたいけど、現在俺は収入ゼロで消費のみだろう、だからもう少し待ってくれないか」
「わたし、また働くわ」
「いや、生活の為だけに働き、生きるのは厭だ。だから、もう少し我慢して、な」
「いや、・・・・・・・わたし、もう、死んじゃうから」
賢は祐子の瞳に真剣さを見た。
「分かった。よし、作戦を考える」
「えっ？」
「お前とふたりで生きることと、探求することと、生活することと、全てを成功させる作戦さ」
「わたしはね。こう見えても生活力には自身があるのよ。大丈夫よ」
「分かった。でも、少し俺に任せておけ、まず失踪の問題を解決してからだ。このことは直接俺にも降り掛っている問題だろう。それも・・・重大な問題だ」
「わたし、もうあなたを離さない。後はあなたにお任せするわ・・・・あなたが消えてしまう理由、そう簡単には分からないと思うの。だから、何故消えてしまうのかより、どうして戻って来れたかを考える方が、問題解決の近道のような気がするわ。だって、そうでしょ。失踪した人を呼び戻す体験をしたのは４人。で、わたしとあなたはその内のふたりな

のよ。その上、あなたには消滅の経験もある。きっと探求の糸口が掴めるはずよ」
「うん。垂水でお前が呼んでいる時俺がどう感じたかと言うと、何かに引っ張られているような感じだったんだ。前から言っているように、俺はこの世界を実相世界の写像と観ている、本当にそうだと思う。人間はその写像の中に命を吹き込まれて生きているんだろう。だから、お前が俺を呼んだ時、写像側から見ると、見えなくなった像をもう一度、見えるように正しく写すようにしていたんだと思う。写像を光と鏡を例にとって考えたら分かるかも知れない。暗い部屋の中に人形と、照明と、鏡を用意して鏡の前に人形を置き、その人形に光を当て、その光の当たった人形の像を鏡に反射させて壁に映している状態が現実世界と考えると、もし今まで、鏡に反射して壁に映し出されていた像が見えなくなった－つまり失踪した－ということは、人形の位置がずれたか、照明の光がずれたかまたは鏡の位置がずれたかのいずれかだと考えられる。そうだろう。そう考えてゆくと、お前が俺を呼んだという行為は、人形を元の位置に戻すか、鏡の位置を正常に戻すか、照明を正しく当てるようにしたかの何れかだったような気がする。しかし、消滅したのはこの世界のごく一部だ。すると照明の光が当たらなかったということは考えにくい。光が全てのものに個別に当たるのはおかしい。この世界に現れている存在物はあまりにも多い。それに実相の世界は時間も空間も無いはずだから、人形の位置がずれて、それを元に戻したというのも違うと思う。そうすると、お前が俺を呼んだ時に起こったことは、鏡の位置を正常に戻したことに相当する。これを現実世界で考えると、鏡とは、実相世界の像を映し出す過程の象徴だと思うんで、お前が実相世界からこの世界に像を映し出す経路の歪みを直したと言える。それが何故、お前の呼び戻す意識によって起こるかだが、それはこの世界に充満しているエーテルの特性に起因するんじゃないかと思う。この世界は丁度、パソコンの液晶画面のように光の通り道にある液体の結晶の方向が整然としている時に映し出されていて、個別の液晶がうまく光を通さなくなると、丁度液晶画面に所々ぽつぽつと抜けが出来るのと同じように、この写像の

世界から消えてしまうんじゃないかと思うんだ。これはあまりにも物質的に話しているから分かり易いけど、本当はこの世界は物質だけじゃなくて、意識によるエネルギーの場と思考による方向付けの場も同時に複合し、作用し合っている世界だと思う。今の人間はほとんど思考と意識の方向が合致していないから、デフォールトで最初に設定してある通りの形に映し出されているんだと思う。もし、意識と思考の方向と力が一方向に正しく作用すれば、写像を任意に映し出せるんだと思う。そうだ、おまえが俺に向けてやったことは、純粋意識と俺を希求する思いの方向がぴったり整合し、それにお前の強いエネルギーが注ぎ込まれて、経路を自分の方向に向けることだったんだ。だから、垂水ではお前の居るところに俺たちが戻って来たんだ。お前の指導が正しかったから、藤代登紀子さんの力も方向も正しく亜希子さんの方向に作用できたんだ。今は光を例にとって話しているから、理解し易いけど、本当は写像の世界に光は関係ないはずだ。この世界が認識されるのは俺たちの五感を通してだろう。目、耳、舌、鼻、触覚、そして心。これらが脳にリンクして、この世界を脳が認識できる世界にしている。この世界の中には何も無い。バーチャルリアリティのゲームみたいなもんだ」
「全く分からないわ。もっと易しく話して・・・そして、わたしには優しくして」
祐子は後の部分を小声で言った。
「いいか、俺たちが見ている世界は、俺たちの頭の中にある世界だ。見えている全ての存在は光という振動要素を反射して、目の網膜に映り、それを脳みそが演算して形として解釈している。ここまではいいよな」
「でも、あまりにも精緻で広大で美しいこの世界を、この小さな頭だけで解釈しているのかしら」
「そう考えると、一つの誤謬に陥る。人間は俺たちが考えている個別の存在じゃないと思う。全体で一つの存在なんだ。今、観ている世界が自分なんだ。原智明が「この宇宙には無限の複留がある」って言っていただろう。ほら、あの語録の中にあったのを覚えていないか？」
「ええ、覚えているわ。変なことを言うと思ったから、印象に残ってい

るわ」
「そのことだ。自分の中に無限の特異点があって、そこに意識の出入り口がある。つまり、それが人々であり、動物であり、植物であり、鉱物、その他あらゆる存在として確立しているものの意識の点だ。その意識の点を通して、全ての存在が自分自身を認識する。その認識した内容が、脳にリンクしているんだと思う。だから、あまりにも巨大な世界をこの小さな脳で認識できるんだ。唯物的な科学者が言うように、脳だけで判断しているんじゃないと思う・・・ところで話を戻すと、光が当たって現れた情報を脳が演算して、形として解釈する訳だ」
「脳が世界の形を理解するところだけは、理解できるわ」
「うん、取り敢えずそれが分かればいい。・・・ところが、一旦光が無くなって、真っ暗闇になると、脳は何も分からなくなる。つまりは何もなくなったのと同じになる」
「それはそうだけど、だけどもともとそこにあったものは、また光を当てれば見えるでしょ」
「そう、そこには既に写像があるからだ」
「その写像ってのが何かということね」
「そういうことだ。今は目で見て認識することを言ったけど、真っ暗闇で、耳に何かが聞こえた場合を考えてみるといい。盲人はこの状態でものを判断しているし、蝙蝠はそれが常態で生きている。暗闇にある物体が発したり、物体にぶつかって来た音を認識しているんだ。この情報も脳が演算して、処理して盲人達の場合は存在を認識する仕組みとして働く」
「うん、それも分かるわ」
「そして、臭覚や味覚も分かるよな」
「うん。それも分かるわ」
「もっと重要なのが触覚や知覚だ。俺たちはものに触れたり、ものを感じたりするだろう。この感覚が、写像を実体のあるものとして認識するのに最も役に立っている様に思う。だから、生知識の科学者達は、「だってそこにあるじゃないか」とか「考えているから自分があるんだ」な

んて言って、それで写像世界を実相世界と勘違いしてしまっている」
「でも、写像世界って、実体のある世界じゃないの？」
「うん。見た目はそう見えるし、そう感じられる。それは、それをいじってそこからいろいろなものを作り出したりできるからだ。複留を除いて人間は何でも加工して作り出せる」
「それじゃ、それが実体のあるものなのじゃないの？」
「いや、量子的な観点から見ていくと、物質とは確率的にそこにあるかも知れないし、無いかも知れない光そのものなのだ。人間が見ると、初めてそこに存在が確定する要素の集まりが物質だ。そして光は振動なんだ。光が物質的な特徴を示すのは、実世界からの写像を映しているエーテルがあるからで、そのエーテルが振動して、原子を作る。更に振動しているミクロの要素の集合が分子を作り、固まりとしての感覚を与えているんだ」
「よく分からないけど、つまり、人間が見るから存在があるということになるわね」
「その通り。だけどこれは見るだけではなくて、五感によって認識することで存在が確定するんだ。今の科学ではそこが見落とされている」
「なるほど、人間の感覚が存在を確かなものにしているってわけね」
「そうだ。存在を確定するだけじゃなくて、自分がその存在そのものなんだ。だから当然、意識が作用すると、そこの部分が生きてくるということになる」
「ふーん、そういうものなんだ」
「エーテルの上に写像が出来たということは、そこがミクロ的に振動したということなんだ。そのミクロ的な振動する要素が集まって形が出来る。ここまではいいね」
「なにか、少し分かったような気がする。とするとあなたが現れたり、消えたりしたのはその存在の確定が為されたり、為されなくなったりしたってことなのね」
「そう。で、さっきの例えで言うと、鏡というのは、みんなの意識が作用できるようにすることに相当するんだきっと。さっき、この世界を確

定しているものには物質だけじゃなくて、意識の場、思考の場があるって言っただろう。その両方の場の整合が取れていないからこの世界が見える。逆にその整合が取れると、存在は意識に従って写像の形を作って行くと思うんだ。簡単に言うと、ある方向への執着が起こると、整合が乱れ、それでこの世界の存在が現れてくるんじゃないかと思うんだ。つまり、俺たちの普通に考えるのと逆なんじゃないかと思うんだ。本来はこの世界にこのように固定的に現れることはなくて、ある執着的な意識のエネルギーが作用して、写像を作り出しているんじゃないかって。もし、心を純粋にして、全ての執着を無くして、実世界の方向を向くと、写像は消えて、実世界の原存在のみが残るんじゃないかな。おれ、消えていたとき、自分が存在していることを意識していたことを覚えているからな」
「賢さん、あなた、大変なことを言っているんじゃないの、それって、太古の昔から、無数の人たちが探求して来たことでしょう。虹の階梯にも書いてあったわ」
「実際に、何人かの人たちが、そのようにしてこの世界から消えたんじゃないかな。だけど、今まで、誰もそのことについて、説明できなかっただけさ」
「すごいわ。わたしがあなたを呼び戻そうとした時、強くあなたに執着して引っ張ったのね。あなたはそのわたしの執着に同調して現れたってことになるのね。わたし達、もし執着心が無くなると、消えちゃうことになるのかしら」
「そういうことは滅多に起こらないと思うよ。この世界にはあまりにも執着を起こす要素が多いから。美しいものを見たときに感動して、いつまでも見ていたいと思う。それでその写像は確実にそこに残る。だから俺がお前と一緒に居れば、普通の生活の中では消滅は起こりえないと思う。それに無気力になってその結果執着が無くなっても、やはり消滅は起こらないと思うよ」
「やっぱり、あなたはわたしが側にいなくちゃ駄目」
祐子が賢の方に更に身体を寄せて、賢の右腕を自分の両腕でしっかり掴

んだ。
「祐子、俺には絶対お前が必要だな。そうだ、今の考えに基づいて、これまでに起きた失踪事件で消滅した人達一人ずつについて、その時の意識の状態を仮定してみるか」
「そうね、面白いわ」
賢は失踪事件調査ノートの白紙のページを開いて、「無執着を原因とする消滅原因の仮定」と題名を書いた。そして、Ｎｏ．と事件名を記載して、その後に三行ずつ空白の行を置いて列記していった。
「祐子、Ｎｏ．１の早瀬由美さんのケースはどんな状態だったと思う？」
「わたし、早瀬由美さんはこの原理に気付いていて、意図的にそういう状態を作ったような気がするわ」
「うん、俺もそう思うな」
賢は祐子に見せていない早瀬由美から受け取った冊子の内容から、既にそんな印象を受けていた。賢はそれを簡潔に書き込んだ。
Ｎｏ．１　早瀬由美の消滅：魔術的な存在消滅の試行として、意図的に自分の意識を解き放った可能性がある。超常的な現象への執着があった。と書き付けた。
「次は野岸孝子さんの場合だ・・・・ゆきさん、どうしているかな？」
「そうそう、ゆきさんからの手紙が届いていたんだっけ。本棚に置いてあるわ」
「いや、あとで見るよ。今は一通り仮定を書き込んじゃおう」
「そうね。でも、野岸孝子さんのことはよく分からないわ。だって、ゆきさん達のことをとても愛していたはずだし、ご主人のことも」
「そう、それだ。ご主人のことだ。ご主人に鍵があるような気がする。やはり、先ずゆきさんの手紙を読んでみるか」
祐子は立ち上がって本棚からゆきの手紙を持って来た。賢はその手紙の封を切ると、祐子が覗いて見ているのを気にも留めずに読み始めた。
「拝啓
親愛なる内観さま
　先日は大変お世話になり、ありがとうございました。皆様にとても優

しくしていただき、その上おみやげまでいっぱいいただいて、わたくしたちはとっても幸せです。あなたから買っていただいた財布はいつも肌身離さず持っています。おみやげを親戚の人たちやお店の仲間に配りました。みんなとても喜んでくれました。二人の弟たちもわたしと同じようにお財布を大切にしているようです。仕事が終わって、家に帰り、家事を済ませて弟達が寝静まってから、一人で、あの日のことを思い出しています。祐子さんや亜希子さんに優しくしていただいたことを思うと、感謝の思いが湧き上がってきます。でも、ふとあなたのことを思い出すと、何故か胸がきゅっとして、涙が流れてきます。そして、またあなたにお会いしたくなってきてしまいます。弟たちもあなたのことをお兄さんの様に思っているようです。でも、わたしはまたいずれ内観さんにお会いできると信じていますので、その時のことを考えて、楽しみにしています。話は変わりますが、最近、母の夢を頻繁に見るようになってきました。弟たちも、わたしと似たような夢をよく見ると言っています。いつも母が出て来て、お金をくれたりお米をくれたりするのです。夢の中で母に会っていて、目が覚めると、姉弟三人に戻っていて、また寂しい思いに捕らわれる日が多くなってきました。これは何かの兆候でしょうか？あなたが、「お母さんは必ず戻って来る」っておっしゃってくださったのを思い出しました。もしかしたら、母はわたくしたちのことを心配しているんじゃないかと思い、昨日などは三人で泣き出してしまいました。こんな時、あなたがいらしてくださったらと思って、あなたと一緒に夕飯を食べているところなんかを想像したりすると、なんか胸がどきどきしてきて、身体が熱くなってきます。それでも、わたくしたちは大丈夫です。しっかりと毎日やるべきことをやって生活しています。あなたもお体を大切になさってください。そして、祐子さんと亜希子さんによろしく申し上げてください。いろいろありがとうございました。

かしこ

ゆき」

「いやだ、ゆきさん、あなたに恋しちゃったみたいね」

「若い女性だから、一時の感傷だよ。三人だけできっと寂しいんだ。早く野岸孝子さんを何とか引き戻してやれるといいな」
「ええ、そうね」